
ジョーカー

スーパーマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジョーカー

【Nコード】

N0462U

【作者名】

スーパーマン

【あらすじ】

謎の灰色の穴に吸い込まれた神童明羅^{しんどうあきら}。その灰色の穴を通り、着いた先は剣と魔法のありふれた異世界バルサレム大陸。そこには5つの大国があり、アスレイド王国、リレイム王国、ウルレイド皇国、エラフィディア共和国そしてバルベロス帝国がある。そしてこのバルベロス帝国が4つの大国に侵攻して、五年が過ぎようとしていた。高校生だった神童明羅はここで自分の才能をどのように使うのか！？注・はじめて書いた小説1号なので、宜しく願います！

プロローグ（前書き）

今回の作品は初めてなので読みづらかったらすいません！

プロローグ

少年の目の前に灰色の穴が開いていた。

その穴は大人一人は楽に入れるほどの穴だ。

少年は危険を感じその穴から逃げようとするが、その灰色の穴に引き寄せられて――

「おわあああああ！！」

「神童どうした！？」

「・・・あれ？」

さっきのは…夢か？

「おい！神童！」

「あつ・・・は、はい何ですか？」

「いや、それはこっちのセリフだ」

先生は苦笑いしながら言った。

「あつすいません。寝惚けてました。」

俺がそういうとクラスメイトが一斉に笑い出した。

「おいおい、怖い夢でも見たのかよ。」

俺の親友の小野寺健太が笑いながら聞いてきた。

俺は苦笑いしながら口を開きかけたが先生によって遮られた。

「神童大丈夫か？明後日はテストだぞ」

「はい、大丈夫だと思います」

あれは夢か…変な夢だな。まだねみくなあ…

そして俺はまた眠りについた。

――

「なんじゃそりや変な夢だなあ」

「うっせ…俺が言いたいよ」

今は学校からの帰宅途中、親友の健太に夢のことを言って家に帰っている。

「てか明羅いっつも寝てるけどなんでテストいいんだよ」

「知らね〜よ、睡眠学習ってやつかな？」

「くそ〜俺なんてなあ〜——」

健太が苦虫を噛みつぶしたような顔で愚痴を言ってきた。

ふっ…俺とお前じゃあできが違うんだよ

「——…今俺に失礼なこと言わなかったか？」

「め…滅相もない」

何故わかった！？こいつは読心術か！？

俺は頭をかきながら、健太は愚痴を言いながら歩くこと3分、健太と別れる道に来了。

「それじゃ〜また明日なあ」

「おう、また明日」

そう言い健太が手を振ってきたので俺も手を振りかえした。

さて、今日は何をするかな

そんなことを考えながら門を曲がった直後、俺は呆然とした。目の前に例の灰色の穴が見えたからだ。

「……………」

俺は目をこすってもう一度見たがやはり例の灰色の穴が見えてしまった。

うん…どうしよ…選択肢は3つだな

1 見なかったことにする

2 今来た道に戻る

3 例の灰色の穴にダイブ

いやいや3はないでしょ！ あほか俺！

ウン…ドウシヨ…

俺は腕を組み考えているといきなり例の灰色の穴に引き寄せられた。

「うおっ…！くっ…踏ん張りきれねえ…」

なんとか四つん這いになって踏ん張ったがじょじょに例の灰色の穴に引き寄せられる。そして――

「おわあああああ！！！」

例の灰色の穴に吸い込まれた。

一話 出会い

ここ、アスレイド大国の首都セルディーン。一般人がどんなに働いても絶対に住めない豪邸の一室に二人の人が話あっていたい。

一人は髪をオールバックにした青みがかった銀色の髪に蒼い目をしていて、目の色と合わせた青色のブレザーと銀色のジーンズを着ている40前半くらいの男。もう一人は同じく青みがかった銀色の髪を腰まで伸ばしており、これもまた同じく澄んだ蒼い目をしており、足首まである水色のドレスを着ている15、6才くらいの顔立ちの整った美少女。

「だからなんで私が好きでもない、しかも他国の男と結婚しなくちゃいけないのよ!」

青みがかった銀色の髪と蒼い目をした美少女、アリス・カサーニ・フリーズンは憤慨しながら言う。

それに対しアリスの父、ダリシヤ・カサーニ・フリーズンは冷たく言い放った。

「アリス、これももう決まったことだ。今さら言っても遅いぞ。」

しかしまだ納得出来ないアリスは怒りを父ダリシヤにぶつけた。

「あんな変態貴族に私が結婚しなくちゃいけないのよ!まだほかにいっぱいいるじゃない!とにかく私はいや!絶対に嫌!」

ダリシヤは何回目かの同じやり取りに痺れを切らし、息を吸い込み叫んだ。

「アリス！何回同じことを言えばいいんだ！これはもう決まったことだ！政治に私情を出すんじゃない！！今日はもう遅いから寝なさい！」

そう言い、ダリシヤは自分の部屋に早足で戻った。残されたアリスは涙目になり、のろのろと自分の部屋に戻った。そしてベッドに入り今度のことについて考え込んだ。

もうお父さんなんて大嫌い…こんな家出てってやる！もうずっと前から思っていたけど今度こそ出てってやるわ。明日の明け方にここを出ていって何処に行こうかな…あつ…あそこなら大丈夫かな…？よし、今日はもうねましょ。明日は早いわ。

――――

アリスはなるべく音をたてないように玄関まで早足で行った。そして玄関を出て自分の家を見た。

「お父さん、お母さん、さようなら」

アリスはそれだけをいい残し今度は自分に気合いを入れた。

アリス、頑張るのよ！気合いがあれば何でも出来るわ！

そしてアリスは走った。

ここから北東に3キロあるアスレイド山脈へ――

——アスレイド山脈——

アスレイド大国の首都セルディーンから北東に3キロ進むと着く。
アスレイド山脈は、3メートルほどの高さの木が全体を覆っていて、
アスレイド山脈を越えるとリレイム大国に出る。

ここ、バルサレム大陸の魔獣は下級魔獣・中級魔獣・上級魔獣そして最上級魔獣と分かれている。

下級魔獣の強さは一般兵士1人ゝ50人相等。

中級魔獣の強さは一般兵士50人ゝ100人相等。

上級魔獣の強さは一般兵士100人ゝ1000人相等。

最上級魔獣の強さは一般兵士1000人以上。

そしてアスレイド山脈の魔獣は、下級、中級、上級の魔獣が沢山おり、わざわざここにくる人はほとんどいない。よって、10年に何頭かの最上級魔獣・龍種が卵を落としていく。

この事からアスレイド山脈は別名、龍の産卵所と呼ばれている。

アスレイド山脈の中央、そこには一人の少年が大の字になって静かに眠っていた。そしてその少年の目の前に一匹の灰色の毛皮を纏った狼がいた。その狼は今にもその眠っている少年に飛び掛かるとしている。

「グルルルルルルルッ」

狼の唸り声を聞いて少年、神童明羅が目を覚ました。黒髪黒目の整

った顔立ちに灰色をした学校の制服を着ていた。

「う…ん…。ん…？何だ…ここは…」

明羅は目を擦り、辺りを見渡す。そして、一番最初に目に留まったものは――

「グルルルルルルル」

今にもこちらに飛び掛かろうとしていた灰色の毛皮を纏った狼だった。

「……………はい？」

これは夢か…？

起きたら目の前に狼がいましたってどんな夢だよ……………んん？こいつ本当に狼か？頭は一つ、足は四本、そこまではいい…尻尾って二本あったっけ…？

と、明羅が考え込んでいると目の前の狼？が「グルアアアア！」と叫びながら襲い掛かってきた。

「うおっ！」

明羅は襲い掛かってきた狼を右にかわしたが…

「ええええええ！どわあああ！」

明羅は右に大きく避けすぎて、右肩を木に激突させた。

「いつてえー…」

俺ってこんなに凄かったっけ…？さっきいた場所から20メートルは離れてるぞ…俺あり得ねえー

明羅は考え込んでいたがすぐにやめた。さっきの狼？がこちらに走って来たからだ。

「考えている時間はないってか。…こい！」

明羅は右足を下げて構えを作った。

狼？は右斜め前から牙で噛み付こうとするが、明羅はそれを左に避けて狼？の左頬に右足で蹴りを入れた。

「ギャウンッ」

狼？は悲鳴を上げて5メートル先の木に激突し、そのまま動かなくなった。

「ふうっ…。なんだここは…俺は確か…あっそうか。変な灰色の穴に吸い込まれてここに来たんだけな…」

明羅はため息と共に悪態をついた。

「意味わかんねえよ…バカヤロウ！」

明羅は5分ほど休み、狼？が目を覚ます前にその場を離れた。

「うーん…まずはここから出るのが良さそうだな。また変なのに襲われたらやばいし…」

歩くこと一時間。同じような風景を何十回も見せられ、明羅は精神的に疲労していた。

「あゝゝゝ…だりゝ…」

明羅は背中を木に預け休もうとするが、近くで獣の鳴き声を聞き、明羅は辺りを見渡した。そして、辺りを見渡し終えたとため息を吐いた。

「おいおい…マジかよ」

明羅は右手で頭をかきながら言った。明羅の周りには十匹のさつきと同じような狼？がいた。

「もうやけくそだ！やってやるぜ！かかってこいや！」

明羅はそう言いながら構えを作った。最初に二匹の狼？が左右に分かれて噛み付いてきた。明羅は右からきた狼？の右頬を蹴り、その衝撃を生かし左からきた狼？の顔面を右ストレートパンチで殴り付ける。その二匹の狼？はお互いに木に激突し動かなくなった。二匹の狼？を吹っ飛ばした直後、右腕と右足を見ると狼の血で赤く染まっていた。

「あああああ！俺の制服があゝ！お前ら…絶対許さん！」

今度は真正面から来た狼？に右前蹴りを顔面にぶつけた。バキィイ！と言う音とともに蹴られた狼？は口から血を吐き出した。その狼

？が怯んだ隙に「おらああ！」と言う掛け声を言いながら左回し蹴りを横腹にぶちこみ吹っ飛ばした。

なんだか身体が軽い…これなら行けるぜ！ぎったぎたのめっためたにしてやる！

「ばつちこいや〜！！」

明羅は自分に気合いを入れるために叫んだ。狼？たちは明羅を手強いと見て、七匹同時に襲い掛かるうとしていた。

しかし狼？が飛び掛かるとする直前に少女の声が聞こえた。

「——大雪原の白き精霊よ、我にその力を与えこの地に出現せよ！我は大いなる魔力を使い魔法を駆使する者なり。永遠の凍てつきを使い、我が力となりたまえ！」

明羅と狼？たちはいきなりの事で一瞬ビクつとし、同時にその声の主の方を見た。その声の主は杖を狼？たちに向け詠唱を早口で唱えていた少女だった。そしてまた少女が詠唱を唱えた。

「くらいなさい！アイシクルファンゲ！」

すると狼？たちの下から無数の巨大な氷柱が狼？たちの頭、心臓、腹などを貫き、その命を刈り取っていった。

「うおっ…すげー…」

明羅は呆然とその下から生えた巨大な氷柱を見ていた。

明羅はもう一度この巨大な氷柱を作った少女を見ると、銀色の髪に

青い目をしていて、白のＴシャツに水色のジャケットを羽織り、銀色のミニスカートに白いソックスそして動きやすいように白のスニーカーを履いている15、6才くらいの美少女だった。

一話 出会い（後書き）

後書きに人物紹介します。

名前・神童明羅

年齢・16才

身長・175センチ

性別・男

黒髪黒目の明るい少年

筋力・

体力・

魔力・

敏捷・

器用・

顔・

名前・アリス・カサーニ・フリーズン

年齢・16才

身長・158センチ

性別・女

腰まである銀色の髪に青い目をした活発な少女

顔・
器用・
敏捷・
魔力・
体力・
筋力・

二話 発覚（前書き）

一話の内容をだいぶ変えました。

誤字脱字があれば言ってくださいな♪

二話 発覚

アリス・カサーニ・フリーズンは明け方に自分の家を出るための準備をしていた。白いＴシャツに水色のジャケットを羽織り、銀色のミニスカートと白いソックスそして動きやすいように白のスニーカーを着ていた。腰には小銭が何枚かしか入らないような小さな袋を着けていた。そして背中には１メートルくらいの杖を背負っていた。準備をしながら一時間、アリスは旅立ちの準備を終えた。そしてアスレイド山脈に向かった。明け方に家を出たので、昼頃にはアスレイド山脈の入り口に着いていた。

誰にも出会わずにここまでこれたのはいいけど、…これからどうしようかな…

アリスは額に手を当て、考え込んだ。そして、30秒ほど経った時、アリスは決心した。

よし、この山脈を抜けてリレイム大国に行こつ。まずはここを抜けないと。

いつ追っ手が来るかわからないし…

「はあ…、一人じゃ心細いよあ…。う…、どうか魔獣が現れませんように…」

アリスは祈りながらアスレイド山脈に足を踏み入れた。リレイム大国へ向けて――

アリスの強さはだいたい中級魔獣の中位ほどなので、上級魔獣に出会わなければアスレイド山脈を一人で渡ることは不可能ではない。しかし、あくまで不可能ではない、だ。中級魔獣が四、五体いつきにすれば殺されてしまうだろう。よってアリスの行動は命懸けなのだ。

アリスが山脈に入り、歩くこと二時間、ここまで魔獣と五体出会ったが、全て下級魔獣だったので難無く倒せた。アリスはあまり体力があるほうでは無いので、木にもたれ掛かり休息を取った。

「ふう…まだリレイム大国に出るまでにはあと3日はかかるわね…、はあ…こんな所で野宿とかやだな」

アリスはため息を吐いた。5分ほど経った時、近くで魔獣の鳴き声が聞こえてきた。すると今度は男の人の声が聞こえてきた。

「……………！…ってやるぞ！かかってこいや！」

アリスは男の人が魔獣に何かをいつているのを聞いた。

「…誰かが戦っているの？」

アリスが呟き、声のほうに近付こうとすると魔獣が吹っ飛んできてアリスの近くにある木にぶつかり動かなくなった。直後に男の人の悲鳴が聞こえた。

「！…助けに行かなきゃ！」

アリスは背中から杖を取り出し、悲鳴が聞こえたほうに走った。そこで目に掛けたのは、右腕と右足を血で赤く染めた黒髪黒目のだいぶ整った顔立ちをしていた一人の少年と、その少年を囲んでいた七体の魔獣・ウルフだった。

ウルフは下級魔獣の中では下位でもっとも足が速く、なかなか逃げ切れない。いつも五、六体で群れて行動している。アリスは杖をウルフたちに向けて詠唱を唱えた。少年とウルフは突然のことに驚き、こちらを振り向いて固まっている。

「――我に力よ！くらいなさい！アイシクルファンゲ！」

アリスの魔法はウルフの所々を貫き、命を刈り取っていく。全てのウルフの命を刈り取ると、まだ呆然としていた少年に優しく話しかけた。

「もう大丈夫よ。右腕と右足を怪我してるみたいだから治してあげるわ」

――

「もう大丈夫よ。右腕と右足を怪我してるみたいだから治してあげるわ」

目の前にいる少女はとても優しく話しかけてきた。明羅は話しかけてきた少女を上から下までまじまじと見た。

うおっ…めちゃくちゃ可愛い！俺、こんなに可愛い美少女見たことないぞ…！

顔も最高…スタイルも抜群、胸はC…ゲフンゲフン。明羅がそんなことを考えていると、少女が首を傾げながら話しかけてきた。

「あの…大丈夫？」

「あ…ああ。さっきは助かりました。ありがとうございます。」

明羅は頭を下げ助けてもらったお礼をした。

「敬語なんて使わなくていいよ？…見たところ私と同じくらいだし。あつ、私はアリス。あなたの名前は何て言うの？」

美少女、アリスが聞いてきたので明羅は質問に答えた。

「俺は神童明羅、明羅が名前だよ。さっきは本当にありがとうございます。」

「アキラ君ね。たまたま通りすぎようとしていただけだし別にいいよ。…右腕と右足に血がついてるけど大丈夫？」

「これか…？これはさっきの狼みたいなやつの返り血だから大丈夫だ。」

明羅は制服についた血を指差しながら言った。

くう…優しいな。顔もいいしスタイルもいいし、おまけに性格もいって凄すぎる！

するとアリスは疑問顔になった。

「狼みたいなやつって…あいつらはウルフって言う魔獣よ。もしかして知らなかったの？それにあんまり見掛けない服だし…アキラ君はどこから来たの？」

アリスが尋ねてきたので明羅は考え込んだ。

うーん…、俺がこの世界の人じゃないって言ったら信じてくれるかな…？嘘をつくか？…でも助けてくれた恩人だからな…どうするか…。

明羅が黙り込んで考えていると、アリスがおそろおそろ聞いてきた。

「アキラ君…？聞かない方が良かった？」

アリスが困り果てた顔で聞いてきたので、明羅は慌てて答えた。

「いやっ…そういう事じゃ無いんだけど。……よしっ」

明羅はアリスの顔を真正面から見て言った。

「アリス、俺が今から言うことは嘘じゃないからな。わかったか？」

「ええ、わかったわ。」

アリスは姿勢を正し、真剣な顔になった。明羅は大きく息を吸い込み一気に喋った。

「俺は…この世界の人間じゃない。」

――――

「凄く突拍子もない話だけど、そこまで本気なら信じてあげるわ。」

アリスは半ば呆れ、半ば信じている様子だった。

「そう言ってくれると助かる。ありがとな。」

明羅は何故、この世界に来てしまったかを、自分が知っている限り全て話した。

「だから俺はこの世界のことを何も知らないから教えてくれないか？」

明羅は頭をかきむしりながらアリスに頼んだ。

「いいわよ、教えてあげる。」

そして明羅はアリスからこの世界のことを沢山聞いた。

ここバルサレム大陸はアスレイド大国、リスレム大国、ウルレイド皇国、エラフィデア共和国そしてディアロス帝国の五つの大国が支配している。北東にある国はリスレム大国、その南がアスレイド大国、その東がウルレイド皇国、その東がエラフィデア共和国、その北が大陸5分の3を支配しているディアロス帝国がある。

ディアロス帝国が他四つの大国に宣戦布告をし、侵攻してきたのが五年ほど前だ。今、明羅とアリスがいる所はアスレイド大国だ。

そしてこの世界には魔法があり、人それぞれが持つ魔力の量を0～10とすると、0・（魔力を持ってない人）魔法は使えない。

1～3・（下級魔導士）下級魔法のみ使用可能。

4～7・（中級魔導士）下級、中級魔法のみ使用可能。

8～9・（上級魔導士）下級、中級、上級魔法のみ使用可能。

10・（最上級魔導士）全ての魔法が使用可能。

そして9と10の間には天と地ほどの差がある。

魔獣には下級、中級、上級、最上級魔獣と四つに分かれていて、さらに下位、中位、上位と三つに分かれている。今さっき戦ったウルフは下級魔獣の下位だ。

次に、魔法の属性には火、氷、土、風、雷、光、闇の七つの攻撃魔法があり、そして時空魔法、空間魔法、治癒魔法の三つの補助魔法がある。

だいたい魔導士は火、氷、土、風、雷のいずれかの属性を持つ。一万人に一人の確率で闇の属性を持つ人が現れる。百年に一人の確率で光の属性を持つ人が現れる。今のところ光の属性を持つ人はいない。

魔法が使える父か母がいれば産まれる子供も魔法が使える確率が高くなる。

一人が使える魔法の属性は一つしか持てない。

魔導士は全員銀色の髪を持ち、属性に合わせて目の色が変わる。

「私は氷の魔導士だから銀色の髪に青い目をしてるのよ。」

アリスは自分の髪と目を指差しながら誇らしげに言った。

金は銅貨、銀貨、金貨、白金貨の四種類あり、銅貨百枚で銀貨一枚、銀貨百枚で金貨一枚、金貨百枚で白金貨一枚となる。

――――

「まあだいたいこんなところね」

アリスは喋り疲れたのか、いつの間にか出していた水を飲みだした。そして腰に着けてある小さな袋からパンを四つ取り出し、そのうち二つを明羅に渡した。

「だいたい理解した？」

「ありがとつ。うん…だいたい理解した」

明羅が頭の中を整理していると、アリスが話し掛けてきた。

「あとはこれね」

するとアリスは、腰に着けてある小さな袋からソフトボールくらいの大きさの水晶玉を取り出した。

「これはね「ちょっと待って」……なに？」

アリスは自分の言葉を遮られ、少し不機嫌な顔になり明羅に尋ねた。明羅はアリスのそんな顔を見て、申し訳無く思いながら疑問に思ったことを尋ねた。

「何でそんなに小さな袋から色んなものが出てくるんだ？」

するとアリスは若干呆れながら言った。

「本当に何も知らないのね。…まあいいわ。えっと…これは空間魔法が付いている袋だからたくさん物が入るのよ。しかもどんなにたくさん物を入れても重さは変わらないわ。まさにこれは冒険者の必需品よ」

明羅は感心しながら言った。

「へえ、便利なものだな」

「そう、とても便利なものよ。で、さっきの続きなんだけど…」

そう言いながらアリスは手持っているソフトボールくらいの大きさの水晶玉を見せてきた。水晶玉は少し濃い青色になっていた。

「はい、これが魔力検査置よ。これは手に持つだけで魔力の量と属性を計るものよ。私はだいたいこのくらいね」

「おおお！俺、計ってみてもいい？」

明羅は自分も魔法が使えるかもしれないという好奇心が高ぶってきて、興奮しているのを隠しきれず、声を大きくして尋ねた。そんな明羅に苦笑いしながらアリスは答えた。

「全然良いわよ。どんな風になるのかな？私も異世界から来た人を計るのは初めて見るから、ドキドキしてきたわ」

明羅はアリスから魔力検査置を受け取った。明羅もアリスも興味津々の目で魔力検査置を見つめた。すると魔力検査置が右半分はクリム色、左半分は真つ黒になった。

「えっ……！？なにこれ……」

アリスは目を大きくして魔力検査置を見ていた。

「えっと……これってやばいの？」

明羅がそう言った直後、魔力検査置がパキイイン！という音とともに割れた。

「……………」

「……………」

やべえー！割れちまったけど何でー！？俺ただ手に持っただけ何ですけど！？俺何もしてないよ！？うーん……どうしよう……

明羅は内心あたふたしながら、おそろおそろアリスを見た。するとアリスは目を丸くさせながら口を開いた。

「ア……アキラ君は光と闇の属性を持ってるわ！どっちも凄く珍しい属性よ！？しかも二種類も持つてるなんて！最上級魔導士でさえ濃い色で割れることなんて無いのに……魔力検査置が割れるってどれだけ魔力の量が多いのよ！……あり得ないくらい凄いわ……」

アリスは興奮しながら喋りまくった。そんなアリスを初めて見た明羅は少し戸惑ったが、今だ興奮を抑えきれないアリスに尋ねた。

「そ…そんなに凄いのか？」

「ええ！こんなに珍しい属性と魔力を持つてるのは、多分この大陸じゃあなた一人しかいないわ。」

明羅は魔法が使えることに声を上げて喜んだ。

「いやっほ～！俺って魔法が使える～！めちゃくちゃ嬉しい～！アリス！俺に魔法の使い方を教えてくれ！」

「ええ、全然オーケーよ。私もこんなに魔力を持っているのに魔法が使えないんじゃ勿体無いものね。でも今日は遅いから明日ね」

「わかった、でもどこで寝るんだ？」

するとアリスは上を指差した。

「木の上よ」

二話 発覚（後書き）

もうすぐテストなので少し遅くなります。

すいませんでした！

三話 魔法（前書き）

遅くなりすいません！

三話 魔法

明け方、明羅は木の上で目を覚ました。木の上で眠っている間に落ちないようにアリスが氷魔法で平らな寝床を作り、その上に寒くならないように毛布を掛け、毛布の上で眠っていた。

明羅は虚空を見つめ、独り言を呟いた。

「この世界に来て一日が過ぎたか……。昨日は色々有ったな……」

明羅は隣でまだ眠っている美少女を見た。

もう一度眠りに付こうとするがなかなか眠れず、明羅は仕方無しに起き、昨日アリスからもらった魔法学教科書：魔法一覧表と使用法：を読み始めた。

――――

読むこと三十分、読んでいる内に今度は魔法を使ってみたくなり、うずうずしていた。さらに三十分、明羅は我慢が限界にまで達し、立ち上がった。

「習うより慣れよ、だ。アリスちよっくらいって来るぜ」

明羅はまだ眠っているアリスにそう言い、木から飛び降りた。地面に着地すると寝床がある木が魔法の被害に遭わないように五分ほど歩きその場を離れた。幸い、魔獣には出逢わなかった。そして近くにある木を魔法を練習するための的にした。

「まずは…下級魔法からするか」

明羅はそう呟きながら、一緒に持ってきた魔法学教科書を開いた。

「えーっと…ふむふむ。まずは狙いたい方向に片手を向ける。」

明羅は左手で教科書を持ちながら、右手を木に向けた。

「その片手に魔力を集中させる…：こんな感じかな？…なんか右手がむずむずしてきたけど…」

明羅は自分の右手を見ながら眉をひそめた。

「まあ大丈夫かな…？この状態で詠唱するのか。…名前は…：ライトボール：」

と、明羅がそう言った刹那、右手の掌から拳大の大きさほどの光の球が出現し、木に向かって飛んでいった。

ドゴオオオン！

光の球が木に激突する音が響き、砂埃をあげる。光の球が激突した木は真ん中からへし折られていた。

「おおーっ！魔法すげえ！これでもまだ下級魔法だぞ！？」

明羅は魔法が使えて大喜びし、歓喜の声を上げた。しかし、ふと疑問に思ったことを呟いた。

「俺…まだ詠唱してないと思うけど……まあいいか、後でアリスが起きた時に聞いてみよう。」

そして明羅は次の魔法の練習に取り掛かった。――詠唱は唱えずに

――

光の属性の下級から最上級魔法まで一通り使ったが、下級魔法しかうまく使えずに明羅は少し落ち込んでいた。今さっき迄寝ていた木の所にとぼとぼと歩きながら戻ってみると、アリスはもう起きていて、赤いスープの入った鍋をかき混ぜ、朝ご飯の準備をしていた。

「おはようございます、アキラ君」

「おはよう、アリス」

明羅はアリスの挨拶に答え、地面に座り込みながら木にもたれ掛かった。すると、アリスが尋ねてきた。

「アキラ君、今さっきまで何処に行ってたの？」

「ああ、少し離れた所で魔法の練習をしてた。あ、そうだ、魔法は詠唱無しで使えるのか？」

「太古の昔に生きていたとされる魔人と呼ばれる種族なら詠唱無しで使えたらしいけど、私達人間は詠唱無しでは魔法は使えないわ。」

アリスがそう言うと、明羅は困惑した顔をした。

「…うむ。じゃあ俺は魔人の子孫なのか？俺も詠唱無しで魔法が使えたぞ」

「ええっ！？…私の聞き間違えじゃ無かったら、アキラ君も詠唱無しで魔法が使えるって聞こえたんだけど…」

アリスは目を見張り、今までかき混ぜていた鍋を放置し、此方に近づいて来た。

「ああ…、聞き間違えじゃ無いぞ今から見せてやるっか？」

明羅は立ち上がりながらそう答えてやると、アリスはため息をついた。

「私はもうアキラ君のことについて何を言われても驚かないわ…」

「なんだそれ…俺が変人みたいな言い方だな…。俺は健全な十六歳の高校生だ。断じて変人では無いぞ！…それで、見るの？見ないの？どっちなの？」

「はいはい、わかったわよ。…コウコウセイって何？…まあいいか。是非見たいわ。私これでも自分で視たり、触ったりしないとあんまり信用しないタイプなのよ」

明羅は苦笑いをしながら五メートル離れている木に右手を向けた。魔力を右手に集中させる。（むずむずするが、我慢我慢）

「ライトボール！」

言った刹那、明羅の掌に拳大の大きさの光の球が『出現』させ、木に向かって飛ばした。

ドゴオオオン！

光の球は轟音と共に砂埃を上げた。激突した木は真ん中からへし折れていた。

「本当に詠唱無しで魔法を…」

アリスは目を見張り、へし折れた木を呆然と見ていた。しかし、直ぐに正気を取り戻し、明羅の方を振り向いた。

ふふんっとうだ！俺は嘘なんかついてないだろう。

明羅は心の中で叫んだ。

「何そのドヤ顔、少しいらっとくるわ」

「まあそれは置いといて、下級魔法はだいたい使えるんだが中級、上級、最上級魔法が全然うまく使えないんだが…どうしたら上手く使えるようになるんだ？」

「えっとね………ちょっと待って。最上級魔法も使ったの？」

「ああ、そうだが…なぜ睨む？」

「アキラ君、魔法を使う時は場所を考えて使おうかしら。…もし最

上級魔法が成功していたら、此処等一帯は消滅してるわよ!？」

アリスがなかなか見せない凄まじい形相で明羅を見た。明羅は流石にいかんと思い、すぐさま謝る。

「す…すまん。つい魔が差して…、今度からは気を付けます。」

「絶対よ?…まあ今回は許してあげるわ。魔法の使い方については朝ご飯を食べた後で教えてあげるわ。」

破顔した顔でアリスが言い、鍋に入っている湯気を立てて美味しそうな赤いスープを鉄の皿に入れ、木のスプーンと一緒に此方に渡してきた。

おっ旨そうだな、どれどれ…

木のスプーンで掬い、口元に運ぶ。ズズズッと音を立て、赤いスープを飲んだ。

おおっ結構うまいな…味的にはトマトスープに少し酸味を加えた感じだな。

「これは何のスープだ?」

明羅スープをもう一口飲み、アリスに尋ねた。同じようにスープを飲んでいたアリスは、木のスプーンを一度離し、明羅を見た。

「これはペロネスープよ」

「ペロネ…?」

「えつとね…木に生えている酸味のある赤い実よ。食材としてよく使われているわ」

「へー、説明ありがとっ」

明羅はそう言い、ペロネスープを飲んだ。

明羅が黙々とペロネスープを飲んでいると、アリスがおずおずと尋ねてきた。

「ど…どう？」

どう？とは美味しい？と言うことだろう。明羅は破顔し、正直に答えた。

「結構うまいぞ、アリスって料理が上手いな」。

明羅がそう答えると、アリスは安堵のため息をついた。

「本当？…良かった、不味かったらどうしようかと思ったわ…」

「そんなこと無いぞ。アリスは何回も料理を作ったことがあるのか？」

「まだこれが初めてよ」

アリスは少し照れ臭そうに言った。

「初めてでこの上手さなら、料理人に成れるんじゃない？」

明羅がそう言うと、アリスが微笑んだ。

「ありがとう、アキラ君」

その後、雑談をして朝食を過ごした。

――

明羅とアリスはアスレイド山脈を抜けるために歩いていた。

「今思ってたんだけど、アリスはどうしてこんなところに来たんだ？
ここって結構危険何だろ？」

「……………色んな所を見て回リたかったから旅に出たの。」

少し間を置いて、アリスが答えた。

「じゃあさ、俺何処にも行く宛がないから一緒に付いてっていいか？」

「え…ええっ、勿論いいわよ。私も一人じゃ心細かったから…」

「おしっ、決まりだな。これから宜しくなアリス」

明羅はアリスに手を差し伸べ、握手を求めた。

「こちらこそ宜しくね、アキラ君」

アリスはそう言い、差し伸べられた明羅の手を握った。

五秒ほどたって、明羅は手を離しアリスに尋ねた。

「これから何処に行くんだ？」

「まずは此処を抜けてリスレム大国のサロウ都市に行こうと思ってるわ」

「サロウ都市ってどんな所なんだ？」

「えっとね…簡単に言えば商業が盛んで、ギルドもある街よ」

「へへ、面白そうだな」

と話していると前方五メートルほどの所に一匹の魔獣が現れた。その魔獣は額に一本の角を生やした茶色い兎だ。

「こいつはアン普拉ビットね。下級魔獣の下位だからたいしたこと無いわ。今のアキラ君でも倒せると思うわ。」

「おしつ、まかせろ」

明羅はアン普拉ビットに右手を向けると、アン普拉ビットが此方に突進して来た。明羅は瞬時に魔力を集中させる。

「ライトボール！」

刹那、右掌に拳大の大きさの光の球が魔力により創り出され、アン

ブラビットに向け飛んでいく。アンプラビットは突進していたので避けきらず、顔面から光の球に激突する。ドガアアーン！という音と共にアンプラビットは顔面から鮮血を流しながら倒れた。

「おおつ、一撃で倒せた。…まあ一番弱い魔獣だから当たり前か…」
すると後ろから明羅の魔法を見ていたアリスが明羅に話し掛けた。

「流石ね、でもやっぱり魔力コントロールが完璧に出来ていないわ。多分…魔法の威力の三分の一位しか発揮出来ていないと思うわ。」

アリスの言葉に明羅は驚いた。

「あの威力で三分の一！？俺の魔力つてスゲーな…」

「多分アキラ君の莫大な魔力の量でコントロール出来ていない部分を補っていると思うわ」

「魔力をコントロールするにはどうしたらいいんだ？」

「魔力をコントロールするためにはまず、自分の体内にある【魔力の源】…まあ簡単に言えば力の根源を感じ取らないといけないわ」

「ふむふむ」

明羅はイマイチ良く分かっていないが、取り敢えず頷く。

「で、魔力をコントロールするとどんな利点があるのか？」

明羅は今、自分が一番気になるところをアリスに尋ねた。

するとアリスは少し考え、答える。

「魔力をコントロール出来るとね、まず一つ目は魔法を使う時に魔力の量を調整して威力をコントロール出来ることね。」

「ほいほい」

明羅が相槌打つ。そんな明羅を見て、アリスは微笑んむ。

「これは簡単に言うと、魔力を沢山使いたいのになんか使えずに威力が弱かったり、逆に魔力を少しだけ使いたいのになんか使って威力が大きかったりと、そういうことが無いようにするために魔力をコントロールしないといけないのよ」

アリスは腰にある袋から水の入った瓶を取り出し、飲んだ。

「へっ結構大事だな魔力をコントロールするのって」

「ええ、これが出来ないと三流魔導士よ。だからアキラ君はまだ三流魔導士ね」

アリスがくすくす笑いながら言う。

「やべっ、俺まだ三流魔導士から早く一流にならないとな」

「まだ一日しか立って無いから三流で当然よ」

「それもそうだな。人生そんなに甘くないってか。はははっ」

「ふふふっ」

明羅とアリスは一緒に笑い、暫く無言で歩いた。

三十分ほど歩くと、明羅がまた口を開いた。

「魔力をコントロールすると他に何か利点は有るのか？」

「うーん私達は特に無いけど…アキラ君の場合は、体内の魔力を光の属性や闇の属性に変えたりすることかな？光魔法を使いたい時は光の属性に変え、闇魔法を使いたい時は闇の属性に変えて魔法を使わないといけないからね。多分今のアキラ君は光の魔法しか使えないわ」

「何っ…ちょっと試してみる」

そう言い、明羅は歩くのを止める。アリスも明羅に釣られて歩くのを止める。明羅は近くの木に右手を向け、魔力を集中させる。

「ダークボール！」

明羅がそう言うが、辺りは静まり返り何も起こらない。

「・・・・・・・・・・」

「ね？私の言った通りでしょ？」

明羅気持ちが萎えり、少し暗い表情になった。

「ああ…早く魔力をコントロール出来るようにならないといけない

な」

「ええ、もう少しでお昼ご飯だからその時に練習してみたら？」

そして、明羅とアリスはまた歩き出した。

三話 魔法（後書き）

テスト期間中なので少し遅れます。

四話 コントロール（前書き）

遅くなりすいません！

四話 コントロール

歩くこと二、三時間、今は気温が一番暑くなる午後2時。明羅とアリスは汗だくになりながらも歩く。すると、少し開けた場所に着き、明羅とアリスは此处で昼飯を食べる事にした。

「あぢい〜…」

明羅は地面に大の字になり、この暑さの原因の太陽を睨む。

「確かに暑いわね」

しかし、アリスの言葉は然程暑くは無さそうだった。明羅が声のした方を見ると、周りを氷で冷やしタオルで汗を拭っているアリスを見た。

「あつずりい〜。おらに氷を分けてくれ〜」

「しょうがないわね…」

アリスは背中から杖を取り出し、右手で持ちながら言う。そして、杖を明羅に向け魔力を最小限に右手に集中させ、詠唱する。

「——氷の精霊よ我に力よ…アイスブロー」

言った刹那、杖の先から氷の息吹が出現し、少し離れた明羅の周りを氷漬けにしていく。

「おお〜っ、涼し〜、ありがとっ…はくしょんっ…さ…さびい。

あの…アリスさん？もう大丈夫ですよ？…俺まで氷漬けにしなくてもいいですよ？」

明羅はアリスに話し掛けるが応答がなかなか返って来ないのでアリスを見てみると、杖を此方に向けながら腰に有る袋に左手を突っ込み、何かを探していた。

「アリス…！アリス…！おい…！アリス…！」

明羅が何度も必死に呼び、漸くアリスが気付いた時は足から膝まで氷漬けになっていた。アリスは直ぐに魔法を止め、明羅に近寄った。
「ごめんなさい！気付かなくて…」

「まあいいけど…この氷どうすんの？は…はくしょんっ」

明羅はくしゃみを漏らしつつ尋ねた。そんな明羅を見て、ばつが悪そうにアリスが言った。

「火魔法を使える人がいないから少しずつ砕いていくしかないわ。しかもこの氷、頑丈だから魔法でしか砕けないわ。そして私は氷魔法しか使えない…私が何を言いたいかわかった？」

「…ああ、わかった。俺の魔法で氷を砕けと…そういう事だな？」

「そういう事よ。…頑張ってね、私は昼御飯の準備をして来るわ…」

そう言い、アリスは逃げるように去って行った。

「おいおい…、氷だけにドライだな…べ…別に上手いと思ってなんか無いんだからな！」

明羅は誰にも聞こえるはずが無いのに虚空に向け小声で叫んだ。

はあ…、暑くは無いんだが…むしろ寒いくらいだ。魔法で砕くつて…下手したら俺って足無くなるよね…！？

明羅は背筋に冷や汗を大量に流しながら、自分の足の周りにある氷を眺めた。

「ま…まずは…はじっこから砕いていくか」

そう言い、明羅は自分の足から一番遠い所に有る氷に右手を向けた。

――――

「はあ…はあ…、疲れた」

明羅は今、真上にある太陽を眺めた。つい今さっき、何とか無傷で氷を砕いたところだ。

「腹減ったな…そろそろ出来たかな？」

明羅は腹に手を当て、アリスのいる方を見ると、周りを氷で冷やし、腕を組んで何か考え事をしているように見えた。明羅がもつと良く見てみると、アリスの周りに食材が沢山置いてあり、どれにしようか迷っているようだった。

何でもいいから早く作ってくれ…。腹が減って死にそうだ…。

そう心の中でアリスに懇願していると、アリスと目があつた。が、慌ててアリスが目を逸らした。

「……………」

しょうがない…。何か別の事でもするかな。と言っても今の俺に出来ることって有るか？……魔力のコントロールの練習なら出来るかな。

明羅はそう結論づけ、目を瞑った。

確かアリスが言うには…魔力って言うのは自分の力の源とか根源みたいな物って言ってたよな。……意味が解らん。ドローコート？

明羅は自分の脳をフル回転させて考え込んだ。

うゝむ…。力の源って言うくらいだから大事な部分って事だよな。例えば、心臓とか頭とか…あるいはち。ことかか…？いやいや、さすがにち。こは無いか…。まあとにかく色々探ってみるか。

そう考え、明羅は自分の体の隅々まで意識を集中させた。足…、腿…、腰…、腹…と、下から順に意識を集中させていくと、丁度心臓に差し当たる所で明羅は首を傾げた。心臓に今までに感じたことのない、違和感を感じたからだ。

ん…？何だこの感覚は…。しかし、意識を集中させないと消えちまいそうなくらい小さな違和感だな…。それでも分かる。これは元の世界にはなかった違和感だ…。

——これが魔力か——。

ここで、明羅は初めて魔導士としての入口に立ったのだ。

だが、まだほんの少ししか感じ取れないな。よし、集中…集中…。

明羅が心臓に意識を集中させようとするが、無情にもアリスに遮られた。

「アキラ君アキラ君、…おい」

アリスの呼び声と共に、いい匂いもしてきた。明羅は魔力コントロールの練習を止め、目を開けてアリスを見た。アリスは少し気まずそうな表情をしていて、目を忙しくキョロキョロさせ、明羅と目を合わせ無いようにしていた。そんなアリスを見て、流石に怒る気が失せた明羅は、破顔し立ち上がりながら優しく声を掛けてやった。

「俺はあんくらいじゃ怒ったりはしないよ。まあ…流石にびびったけど…」

するとアリスは少し涙目になり、上目遣いで此方を見てきた。

「ほ…本当に？」

やべーアリスめちゃくちゃ可愛いわー。こういうアリスも新鮮味が有っていいな。

「ああ、本当だぞ。そんなに暗くならんで元気なりなよな」

明羅はそう言いながらアリスの少し青色のした銀髪をくしゃくしゃ

と撫でてやると、アリスは気持ちよさそうに目を細めて、明羅に身を委ねた。

しばらくそのままだったがずっとこのままだるわけにもいかず、アリスの少し青色のした銀髪から手を離れた。すると、アリスは名残惜しそうに明羅を見ていたが、自分が何をしていたかに改めて気付き、頬を赤らめた。しかし幸か不幸か、明羅はそんなアリスに気付いておらず、自分の腹に手を当てアリスに尋ねた。

「そろそろ腹減ったから飯いいか？」

「いいわよ。今日のお昼御飯はローストビーフよ」

そう言い、地面に置いてあるローストビーフと木のフォークがのつてある皿を二つ取り、その量が多いほうの皿をこちらに渡してきた。

「今日も旨そうな飯だな。どれどれ…」

明羅は木のフォークを取り、ローストビーフの一切れを口に運ぶ。

「（バクツ…もぐもぐ）うめえ、やっぱ最高だな」

「ふふふつ。そんなに褒められたらもつと腕を揮いたくなっちゃうわ」

アリスは本当に嬉しそうに微笑んだ。そんなアリスに少し見惚れてしまうが、なんとか理性を保つ。

くっ…いかん！何も考えるな！む、無心でいろっ。

と、明羅が内心葛藤していると、アリスが首を傾げながら訊いてきた。

「どうしたの？私の顔に何かついてる？」

「い、いやっ！何でも無い。こ、これからも飯を作るのは頼むぜ」

「任せて。もつと美味しくなるように頑張るからね」

「おうっ。期待してるぞ」

その後も二人は談笑しながら昼飯を食べ続けた。

――――

昼飯を食べ終わった後、二人は当初の予定のサロウ都市に行くために暑い中、ひたすら歩いていた。

「なあ、あとどのくらいで着くんのだ？」

明羅が右隣を歩いているアリスに訊いてみると、アリスは顎に手を当て、考える素振りを見せた。暫くすると、アリスがようやく口を開いた。

「今日合わせたら…だいたい二日でここアスレイド山脈を抜けて、そこから歩いて三日、馬車でもあれば一日でつくと思うわ」

そう訊くや否や、明羅は凄く嫌そうな顔をした。

「うえゝマジかよ。暑いしじめじめするし早くここを出て風呂に入りたいぜ」

「それには私も同感だわ。川の水で体を洗ってもあんまり綺麗になつた気がしないわゝ。はあ…早く風呂に入りたいわ」

二人は同時にため息を吐き、一刻も早くここを出るために黙々と歩いた。暫くして、明羅が話し掛けようと口を開いた瞬間、近くからズシイン、ズシインと何とも重厚な足音が聞こえてきて思わず、アリスと視線を交わす。

「…何だ？」

明羅がアリスに訊くが、アリスは首を振るだけだった。重厚な足音はどんどん大きくなり、その足音がこちらに急速に近付いているのが二人には嫌でも分かった。

「なあなあ、これってやばくないか…」

そう言い、アリスを見ると顔から血の気が引いていて顔色が悪そうだった。

「多分とってもやばいわよ」

アリスは背中にある木の杖を手に取り、詠唱を唱え始めた。

今さっきまでの足音が少し後ろの方で止み、唸り声が聞こえてきた。明羅が恐る恐る振り返って見ると、顔の真ん中に眼が一つしかなく、

無毛の頭に青い肌、そして腰には茶色い布切れを巻いており右手には単に錆だらけの鉄棒なのだが、あちこちいびつな形曲がっていて、いかにも凶器として使い込まれていそうだ。身長は少なくとも三メートル以上があるのは確かだろう。こいつの身体は常人より遥かに横幅があり見た目の威圧感は相当なものだ。するとこちらに向けて猛々しく吠えてきた。

「グオオオオオオオ！！」

「ぎゃああああああ！！なんじゃこいつはあああああ！！」

何時もの明羅が絶対に出さないようなものすごい音量で悲鳴を上げるが、それ以上の巨大な咆哮で明羅の悲鳴は虚しく掻き消された。

五話　なんてファンタジー！

「アリスー！なんじゃこいつはあつ！」

明羅は正面にいる魔獣から目を離さずに、横で詠唱しているアリスに訊いた。

「——大いなる氷山に住まう氷の精霊よ……！こいつはサイクロプスよ。中級魔獣の上位で魔法を使えない代わりに筋力は上級魔獣に匹敵するわ！」

早口で答え、アリスは杖をサイクロプスに向けて詠唱をした。サイクロプスはこちらの様子を窺っていてまだ襲ってこない。

「我に力を与えん……！アイス・ショットっ」

アリスの杖から幾つもの氷の礫が生まれ、一斉にサイクロプス目掛けて青白い軌跡を描きながら飛んでいく。氷の礫が皮膚を削りとっていくたびにサイクロプスが苦痛の表情を浮かべるが、致命傷にはほど遠く、掠り傷を作っただけだ。まだ幾つもの氷の礫が発射されているが、そんなことお構いなしに凄まじい咆哮を上げながら突進してきた。そして、アリスの頭を割ろうと鉄棒を頭上まで振りかぶり、なかなかのスピードで振り下ろした。……が、それよりも速く明羅がアリスを抱え、サイクロプスの脇に避けて距離をあける。鉄棒は宙を斬って猛烈な勢いで地面に激突した。

ドガッと衝撃音がして、小石とど土塊が飛び散る。どれだけ剛力なのか、かなり距離をあけたはずの明羅達の足下にまで衝撃波が達し、足下がぐらつと揺れた。

うわっ… あんなんで殴られたら終わりだな。ぞつとするー。

すると今度は、明羅の脇腹目掛けて豪快に振ってきた。明羅はそれをしゃがんで避け、サイクロプスの頭に左手を向けた。ちなみに右手はアリスを抱えていて動かせない状態だ。左手に魔力を集中させる。（と言っても、ほとんど魔力をコントロール出来ていないので余り意味がないのだが、取り敢えずコントロール出来る分だけ）

「ライトボールっ。もういっちょ喰らえ、ライトボール！」

明羅の掌に拳大の大きさの光の球が生まれ、サイクロプスの頭目掛けて飛んでいく。だいぶ近かったので避けきれず、顔面に二つ共綺麗にぶつかった。

ドゴオンと音が響き、サイクロプスの顔面に緑色の鮮血が流れた。しかしサイクロプスは少し痛そうな顔をしていたが、すぐに憤怒の形相に変わり、鉄棒を何度も振り回してきた。

「グオオオオオオオオオオオ！」

「とわっ、うおっ、あぶっ、危ないっ、ちょ、や、やめい！」

普通の一般兵なら一発で即死レベルの威力と速さだが、元の世界では百メートル走全国三位と喧嘩はいつも圧勝で負けなしと（一人で金属バットや鉄パイプを持った五十人の不良達に、掠り傷だけで沈めたこともある）非常に高い身体能力を持ち、しかもこの世界に來てから身体能力が上昇しており、この大陸のトップクラスと勝るとも劣らない身体能力を持っているので、本来ならば、

サイクロプスの攻撃など容易く避けれるのだが、サイクロプスから放出される背筋が氷るような殺気のせいで明羅は思うままに動かせないでいるのだ。

サイクロプスの猛攻を紙一重でなんとか避け続ける。そのたびに右手で抱えられているアリスが「きゃっ」と小さく悲鳴を漏らす、今はそんなことに構ってやれる暇はない。

くそっ、さっきから防戦一方だっ！そろそろこっちから何か仕掛けないと……て言うかなんとか逃げれる隙を作らないといつかあの物騒な鉄棒が当たって死んでまう！

そう考えていると、振り回していた鉄棒が左頬を掠め、それと同時に生暖かい液体を左頬に感じた。

しかし明羅はそんなことお構いなしに地を蹴ってサイクロプスの懐に入り、左手を眼前に突き出し叫んだ。

「フラアツシュー！」

目を灼くかと思うほど閃光が辺り一面に弾けた。サイクロプスはいきなりのこと目逸らすことに間に合わず、もろにその閃光を受けてしまい、目を両手で抑え悶え苦しんだ。

「グオオオオオオオ！グオオオオオオオオオオオ！」

「ふははははっ！ラ。ユタの大佐と同じようにそこで一生苦しんでろっ。ざまあみやがれ！」

最後にそう言い残し、明羅はアリスを両手で抱えた。いわゆるお姫様抱っこだ。そしてくるとサイクロプスに背を向け、風のような速さでその場を離れた。もちろん逃げた方向はサロウ都市のある方向だ。

「アリス大丈夫か…っておい、どうした!？」

話し掛けようとお姫様抱っこしているアリスを見ると、眼を抑えて「眼が、眼がー」と先程のサイクロプスと同じように苦しんでいた。

あっ…しくじった。アリスに眼を瞑っつけて言うの忘れてたな…。

「すまん。先に言つとくの忘れてた」

「くっ…こんどからは…気を付けて…」

だいぶ眼が馴れてきたのか、アリスが少し眼を開けてこちらを見上げてきた。

「……………」

「……………?どうした?」

そう訊くと、アリスが頬を赤く染めた。

「いや…何でお…お姫様抱っこ?それ以前に何でアキラ君が私をだ…抱いてるの?」

「さっきの奴から逃げるのに必死でつい…な。そんなに怒らなくても…今すぐ下ろすから」

明羅はアリスの顔が赤いのは怒っているからと勝手に思い込み、地面に下ろそうとするが、いきなりアリスが声を張り上げた。

「このままがいい！あ、えつと…、あ…足が疲れたからこのままです…」

語尾が消え入りそうなくらい小さな声で余り聞き取れ無かったが、足が疲れたと言っている事が何とか聞き取れたので、腕の中にいるアリスに提案してみた。

「じゃあどっかで休憩するか？」

すると、そんなに首を振ったらちぎれるんじゃないか？と思うほど左右に首を振った。

「さっきのサイクロプスがまた来るかもしれないし、それにアキラ君も早くここを出たいでしょ？」

「まあそうだな。俺陸上部に入ってたから結構体力に自信があるし、さっさとここを出たいしな」

「リクジョウブ…？」

「あ、何でもない。こつちの話」

はあー、何時になったら街に着くんだ。

「じゃあいきますか」

「ええっ」

――――

サイクロプスに遭遇してからだいたい三時間、明羅の腹時計が午後7時くらいを指している。この時間帯になると山脈の中は意外と暗いので、魔力でライトボールを創り、前方一メートルの所に留め、それを頼りに歩いている状態だ。本来夕飯を食べている時間だが、明羅は黙々と歩いている。食事担当のアリスがお姫様抱っこさながら眠ってしまったからだ。ここまで魔獣と何体か遭遇したが、風のように走り、何とかうまく撒いて戦闘は避けている。

幸せそうに眠りやがってー。そんな寝顔で眠られたら起こせないじゃないか！

「nenenenen」

はあ……腹へった。俺のお腹が悲鳴を上げてるよ。何か簡単に食べれる物無いかなー。

明羅は立ち止まり、左手でアリスを支え腰にある小さな袋に手をつ込んだ。しばらく探り、適当に掴んだ物を引き抜くと、三枚の干し肉を袋から取り出した。

おおーっ、何と運がいいのか！これなら簡単に食えるし、多少の腹ごしらえもできるじえ。

一旦干し肉を口にくわえ、起こさないように器用にアリスを背中に回し、おんぶする。背中と左手だけでおんぶし、右手は自由に出来るようにした。

むう…背中暖かくて柔らかい物が…つ。
い…いかないかな。これ

は男の試練だ、何も考えたらいかん！これはパンだっ、柔らかいパンだっ！興奮する事なんか何一つないぞ！

明羅はそう結論付け、口にくわえていた干し肉を二枚外し、一枚はそのまま咀嚼した。

うん、なかなかの味だな。しかしアリスの飯を食ってたら何か物足りないなあ…。

十分に味わって飲み込み、二枚目を食べようとした時、前方に何か…白く小さな物が浮いているのが視界に入った。明羅は食べようとした干し肉を食べずに、ゆっくりと”それ”に近付いた。そして、ライトボールに照らされた”それ”を眼を凝らしてよく見ると、”それ”は体長三十センチほどの小さな雪のように白いドラゴンだった。

「……………」

襲って来ないし…一様大丈夫かな？しかし、ドラゴン…ドラゴンだぜ！？なんてファンタジー！って何かこいつ…いや、小さい龍…ミニドラゴン…略してミドラと名付けよう。さっきからミドラががんみしてくる…いやっ、正確には俺が右手に持っている干し肉を見てんのか。ここで干し肉のせいで戦闘になるのはまじ勘弁。しようがないなあ、後で何か他のを食うか！。

明羅はミドラに手が届く所までゆっくりと近付いた。その間、ミドラは近付いてくる明羅の様子を窺うだけで、羽をパタパタさせ、空中に浮いている。明羅は右手に持っている干し肉をミドラの目の前に持っていった。

「ほれっ。この干し肉食う…あれ？」

明羅が干し肉食うか？と訊いている最中に、いきなり干し肉が消えたのだ。しかし、明羅がミドラを見るとせわしなく顎が動いているのが見えた。右手を見て、ミドラを見て、もう一度右手を見て、明羅は啞然とした。

うおおお？食べるの早すぎだぞ！？全然見えんかったぞつ。

明羅が啞然とミドラを見ていると、ミドラが羽をばたつかせながらこちらに近付いてき、そのまま明羅の頭の上に乗った。そして、そこで腰を下ろし、寝息を立てて眠りに就いた。

……………何か懐いた……………

五話 なんてファンタジー！（後書き）

誤字、脱字があれば教えてくださいな！

六話 光龍（前書き）

遅れてすみません。

六話 光龍

雪のように白い体毛を持った小さなドラゴン、ミドラ（明羅命名）と出会って二時間、大して疲れてもいないし、眠くもないので黙々と歩いている。ミドラを頭に乗せ、二時間歩き続けているのだが、未だに魔獣と遭遇していない。平和なのはいいことなのだが、明羅にとっては不気味なほど平和なのだ。今まで頻繁に現れていた魔獣が、しかも魔獣は夜に活発に動きだすのにも拘わらず、何故一体も現れないのか。ミドラの仕業かと考えいるが答えが無いので、明日アリスが起きた時に訊いてみようとは今は答えを保留にしている。

まあ魔獣が襲って来ないのは俺としては嬉しいし、よしとするか。今日はこれくらいにして寢床を確保するか。

明羅は近くにあった木にアリスとミドラを起こさないように飛躍し、木の上に着地する。そこで腰にある袋から二枚の毛布と紐を取り出し、頑丈そうな太い木の枝にくくりつけて簡単なベッドを作った。いわゆるハンモックだ。それを二つ作り、片方におんぶしているアリスを寝かし、明羅もミドラと一緒にもう片方のハンモックに寝そべった。早めに寝ようとしたが、まだ全然眠くなく、せつかく余った時間なので魔力コントロールの特訓をする事にした。

四時間ほど特訓をし、眠くなってきたので浅い睡眠を取ることにした。

明羅が起きると、もうすでにアリスが起きていて、ハンモックの上

から明羅の顔を凝視していた。

「おはよー、アリス」

「おはよう、アキラ君」

横になったまま挨拶すると、アリスも微笑し挨拶を返してくれた。

「アリスは昨日めちやくちや寝てたな」

明羅が身体を起こしながら言った。それと同時にミドラも身体を起こし、明羅の頭の上に乗っかり興味無さげにアリスを見ろした。

「ええ、おかげさまで……ってそれは何？」

アリスは明羅の頭の上にいるミドラを見て、目を丸くした。

「んあ…？あ、昨日の夜に歩いてたら出会って、干し肉あげたら何か知らんけど懐いた」

『いやー、僕は干し肉くれただけじゃ懐かないよー』

「「喋った!？」」

『僕は喋ってないよー。これは念話だよ』

「念話…？」

そう訊くと、ミドラが頭の上で頷いた。

『そうっ、簡単に言うとな直接脳に話し掛けて会話をする事かな。アキラ達も思考するだけでいいよー』

明羅がミドラの念話に答えようと口を開いたが、アリスに先を越された。

「ねえねえ、ちょっといい？」

『……………ちっ』

とてつもなく長い間を置いて舌打ちみたいな音が頭に響いた。さらに「なにでしゃばってんだよこのじゃじゃ馬がぁ！」とでも言うような表情で言うミドラ。

そんなミドラに明羅は冷や汗を大量に流しながらアリスを横目で窺うと、顔を引き攣らせた状態で固まっていた。

これはさすがにいかんと思い、ミドラに話し掛けた。

「そっ…、そう言えばさっき…懐いたとかなんとか言ってたよな？」

『うん、言ったけどー？』

ミドラがいつもの子供っぽい口調で言う。

「干し肉もらって懐いたんじゃないならどうして俺になついたんだ？」

『アキラって光の魔法使えるでしょ？』

「よ…よく分かったな。何で分かったんだ？」

そう訊くと、ミドラが得意顔をして明羅の髪の毛を弄りだした。

『普通の人間には分からないけど、アキラから膨大な、それこそ僕ら龍種をも上回るほどの光の魔力と…、闇の魔力を感じるんだ。まっ、普通分らないほうがおかしいんだけどね！』

そう言いながら、明羅の頭の上から皮肉たっぷりな笑みでアリスを見下ろした。

アリスの方に視線を戻すと、忌々しそうにミドラを見ていた。

「ま…まあいいわ。そんなことよりもあなたって”光龍”でしょ」

アリスがそう訊いたが、ミドラに綺麗に無視された。

『話は戻るけど、人間で光の魔力を持つ人達は僕らにとってご主人様みたいな者だから、好意を持って当然なんだよー。まっ光の魔力を持つ人がゼロに等しいからそういう習慣は最近じゃ廃れているんだけど』

「あなたって光龍でしょ」

もう一度言っが、半泣き状態でめちゃくちゃ可哀想だった。

『……………』

しかしこれも無視された。あまりにも可哀想だったのでそろそろミドラに注意する事にした。

「おい、そこまで無視するのは止めてやれい。さすがに可哀想だぞアリスが」

『むう…アキラが言うなら無視するのは止める。』

渋々、とした感じでミドラが言った。

明羅は破顔して頷くと、アリスのいる方に首を曲げた。…まだ少し涙目だ。アリスはむちゃくちゃ打たれ弱いようだ。

「さつきから気になってたんだけど」光龍”って何だ？」

「ぐすつ、さ…最上級魔獣の中位に相当する魔獣よ。名前の通り光の魔法を扱える龍の事よ。本来はもつとでかいはずなんだけど…。」

『…五十点。確かに光の魔法は使えるけどそれだけじゃないさ。僕たち光龍は治癒魔法も使えるのさー。後、本当は体長五メートルくらいあるけど、アキラと一緒に行動するんじゃ邪魔だから体を小さくしているのさー』

まだ少し皮肉っぽい言い方だったが、それでもミドラにとっては頑張ったほうだ。アリスも無視されなかったことが嬉しかったようでにこにこ微笑んでいた。明羅はそんな二人の様子に満足し、興味本意でなにげなく訊いてみた。

「ミドラの巨大化かー。見てみたいなー。」

ちらつと頭の上にいるミドラを見た。案の定、ミドラは明羅の願望をすんなり受け入れた。

『いいよー。じゃあ今から元の大きさに戻るから少し離れててー』

ミドラが頭の上から降り、地面に着地した。二人も木にくくりつけていた毛布と紐をアリスの腰にある袋に無造作に詰め込んで地面に降りた。

明羅とアリスは言われた通り少しミドラから離れた。

「俺初めて本当の大きさのドラゴン見るからわくわくしてきた。」

「私も……て言うか、まず龍種を見ることが事態が珍しいから私も見るのは初めてよ」

『よし、いくよー』

ミドラのセリフが終わるか終わらないの内に、ミドラの身体がみるみる膨張し始めた。

まず四肢と胴体と腰が十倍程にも膨張し、次に頭が膨張、最後に尻尾が膨張した。ミドラの身体が元の大きさに戻ったのを、明羅とアリスは呆然と見ていた。さっきまで体長五十センチくらいで白い毛皮のドラゴンのぬいぐるみみたいに可愛らしかったのが、今は体長五メートル程の白く凛々しいドラゴンに変わっていた。周りの木がざわめき、近くにいた魔獣達が鳴き声を上げながら逃げていく。明羅達も、もし目の前にいるドラゴンがミドラではなかったら、回れ右して全速力でにげていただろう。それほどの圧倒的プレッシャーがミドラから溢れ出していた。

「すげえ……」

明羅の口からはそれだけしか出てこなかった。

しばらくミドラを呆然と見ていた二人だったが、逸早く明羅が正気を取り戻し、「おっ？」と明羅の気の抜けた声でアリスも正気を取り戻す。

「あきら君どうしたの？」

「いやー、ミドラに乗ってサロウ都市だっけ？そこまで飛んで行けないかなーって思ってた…」

元の大きさに戻ったミドラを見上げながらアリスに言った。

「さすがに都市の入り口まではダメだけど、近くまでなら大丈夫かな」

「おしつ。ミドラー！俺達をサロウ都市って言う所の近くまで乗せてってくれないかー？」

ミドラは少し考え、返事を返した。

『アキラだけなら全然いいんだけど…』

そう言い、隣にいるアリスに目をやった。明羅もアリスの方を向くと、少し居心地が悪そうに俯いていた。明羅は今後のことを考えるという苦笑いしてしまった。

こりゃあ少しずつ慣れささないといけないな。どっちも難しい性格してるもんなー。

「そんなこと言わずに、頼む！」

両手をパンツと音をたてて合わせ、ミドラに再度お願いした。アリスも明羅に続いて言った。

「お願いミドラ。私も背中に乗せて下さい」

『アキラがそこまで言うなら…、まっいいか』

明羅の頼み事に断れず、渋々だが承諾し、四つん這いになって二人が乗れるところまで腰を下ろした。

「ありがとなミドラ」

「ありがとねミドラ」

明羅とアリスは背中に登りながらお礼を言った。そんな二人に軽く微笑し、二人が背中にちゃんと乗ったことを確認して立ち上がった。

『よし、しっかり捕まっててねー』

そのセリフと共に地面を強く蹴って飛躍、翼に光の魔力を集中させ猛スピードでサロウ都市に飛んだ。

風が猛烈な勢いで身体全体に当たり、ミドラの背中に全身で捕まっていけないと振り落とされるほど速く飛んでいた。

「いっやつほー！ー！気持ちー！ー！」

「きゃあああああああああああー！」

明羅が大笑いしながら周りの景色を見て楽しんでいる中、明羅の後ろにいるアリスは明羅に抱きついて絶叫していた。

「こんだけ速く飛べるんなら今日中に着けるんじゃないのか？」

『多分今日中にはサロウ都市に着けると思うよー。でもずっと飛んでるわけじゃないから着いた時は夜になると思うよー』

「了解つ。俺は景色を楽しみながらゆっくりしとくぜ」

『はいなつ。くつろいでねー』

「きゃあああああああー!!」

「……アリスにとってはくつろげそうにないな」

アスレイド山脈の朝、上空二百メートルでは雪のように白いドラゴンが鼻歌交じりに高速で飛び、その上には二人の少年少女がいて、顔立ちの整ったなかなかっこいいその少年は首をキョロキョロして周りの景色を見ていて、温和な美貌をもった少女は少年に強く抱きつき、絶叫を上げているというなんともしュールな光景が生まれていた。

六話 光龍（後書き）

誤字脱字がありましたら教えてください。

七話 空腹（前書き）

遅くなつてすんません!!

七話 空腹

辺り一面雑草が好き放題に伸び、一本一本が大人一人分くらいの高さがある。そこに幅五メートルほどの綺麗に舗装された一本の道が延々続いていた。この道を北東に歩き続けるとサロウ都市に着く。今はお昼頃、道を半分くらいまで行つたところで飛ぶのを止めて昼飯の用意をしようとしているところだ。

ミドラも身長五十センチほどに身体を小さくして休憩している。

ここからミドラで飛んでいくと目撃される危険があるので歩いていこう、ということになり「じゃあ腹ごしらえでもして歩きますかっ」という予定になっていたのだが、肝心の料理担当のアリスが――

「おえええええええええつ」

「ゲロっていた。」

「おいっ 大丈夫か？」

背中をトントン叩きながら訊いた。訊いたのはいいが、誰の目からしても明らかに大丈夫ではなさそうだ。

「おえええええつ、こ…これがつ、おえええええ、だ…大丈夫に…見える？つづつづぶ」

…ご愁傷様です。ここはアリスが回復するのを待ったほうがいいな。一様一人暮らしだったから元の世界では食事くらい作れるんだが…。ここの世界の食べ物とは良く分かん。

早く元気になってくれーっ、腹が減って死にそう。……とりあえず

背中でも叩いてやるか。

「胃の中にあるもん全部出しちまえ。そのほうが楽になるぞ?」

「う…うん。う…おえええええつ。はあ…はあ…、死にそう…。おえええええええええええええつ」

アリスの胃にはもう何もなく、胃液を吐き出していた。

出来ることなら代わってやりたいが、そんなことは出来るはずもないので、ただ背中をトントン叩いて見守ってあげることしかできない。

「そろそろ落ち着いたか?」

アリスは苦しそうに呼吸を荒くさせ、弱々しく言う。

「さ…さっきよりはましになったかな。ちょっと休憩させて…休憩終わったらすぐお昼ごはん作るから…それまで我慢しててね」

そう言い、地面に腰を落として目を瞑った。

「お…おうつ」

内心がっかりしたが、顔には出さずに呟いた。

――

「ふつか…つ!」

勢い良く立ち上がり、右手を上突きだし左手は細く括れた腰に置いて可愛らしいポーズを決めた。

しかし、誰もそのポーズを見ることは無かった。

明羅は地面に俯せに倒れていて、その背中の上にミドラがちょこんと丸くなって眠っていたからだ。

ポーズをやめて、地面に俯せに倒れて動かない明羅に近寄り、訝しげに訊いてみた。

「ちょっとどうしたの？地面に顔面から倒れ込んで…」

声は確実に届いたはずなのに、幾ら待っても返事が返ってこない。今度は明羅の耳元まで顔を近付け、声を張り上げた。

「おい！無視するなー！私は無視されるのが一番嫌なんだよーっ」

耳元で叫んだがぴくりとも動かない。さすがにおかしいと思い、明羅の身体に触れようとしたが、その前にミドラが目を覚まし、アリスを見て首をかしげた。

『……………どうしたんだい』

「へっ？あ、いや、アキラ君がいくら言っても起きないからどうしたのかなーって…」

『今アキラ、お腹が空きすぎて気絶してるよ』

お腹が空きすぎて気絶するって……………ってもうそんな時間！？

「えっと、今時間どのくらい？」

そう訊くと、ミドラが小さく可愛い腕を組み、考える素振りを見せた。

『うーん…、だいたい僕がここに到着してから眠って二時間は経つから…三時くらいかな』

「もうそんな時間かー。私急いでご飯作るからアキラ君よろしくね」

『あつボクの方も作ってよねー』

アリスは破顔し、頷いて見せた。

よーし、今日も腕を振るうぞー。なに作ろうかなー。

腰にある袋の中に手を入れ、主婦のように考え込んだ。

――――

「ウマイ！ウマイ！ウマーーーい！」

『むむっ…確かに味はいいね』

「ふふっそれはよかったわ」

アリスが嬉しそうに口元に手をやった。

今は、アリス特製魔獣ステーキを座って食べている。

得体の知れない魔獣の肉に、食妖岩という岩を粉状に磨り潰して魔獣の肉に振掛け、それを火で焼いて作ったものだ。ちなみに食妖岩は味は塩に似ているが、珍しい岩なので一般家庭ではほとんど使われておらず、主に王族や貴族などといった裕福な生活をしている人たちが食用に使われている。ステーキだけでは味気ないので、アリスが他にポテトみたいなのやほうれん草みたいなもの、それに加えオニオンスープみたいな物を作ってくれた。

ミドラも人間と同じ物を食べれるらしいのでこれらを三人前作ってある。

アリスの作った料理はどれも一流の料理人の如く美味しく、明羅の腹は極限まで減っていたのであつというまに平らげてしまった。

「ふーっ、ご馳走様。アリスの飯は旨いなあ。まあ腹五分目ってところかなー。食い足りないけどなんとか夕飯までがんばるよ」

明羅は自分の腹を叩きながら言う。アリスはまだ半分しか食べていないのにも拘わらず、既に満腹状態なので目を見開いて明羅を見た。

「結構量があつたのにまだ五分目って…アキラ君って意外と大食いよね」

「それけっこーみんなに言われる」

素っ気なく言い、アリスの股の上に置いてある、皿に入っている食べ物を物欲しげに見た。

「みんなって？……あつ…ごめん。嫌なこと訊いちゃった？」

控えめな態度で謝罪するアリスに、明羅は手をひらひらと振って苦

笑いした。

「別に全然気にしてないから気にするな」

そう苦笑いする明羅をまじまじと見て、しばらくしてからアリスが口を開いた。

「アキラ君はその…自分のいた世界に帰りたいとか思わないの？」

突然の質問に多少驚いたが、自分の髪をかき混ぜ、破顔した。

「んー…あんまり帰りたいたとは思わないな」

「でもアキラ君の家族とかアキラ君のこと心配してるんじゃないの？」

アリスの言葉を聞き、涙腺が脆くなったがなんとか涙を吞んで堪える。

そして平常心を装い喋る。…が声が少し震えた。

「……家族…か。俺の家族や親戚はもう誰もいない。みんな若い内に逝ってしまったよ……。俺は天涯孤独の身さ。……だから俺がいた世界に未練はないし、こっちの世界のほうがちょっとこえーけど何かと楽しいから帰りたいとは思わないなー」

そう言い、ちらつとアリスを見ると、易しく弧を描いた眉根を寄せ、申し訳なさそうに俯いていた。

「どうした？そんな顔して」

「私ってバカな女の子だよね…」

「…なんで？」

「だって…私ってば、さっきからアキラ君が辛くなるようなことばかり思い出させて…、私ってバカでつまらない女の子だよね…」

俯きながら吐き捨てるように呟いた。

うーむ…全然気にしてないって言っても納得しないだろうな…。
どうするか……

明羅が空っぽの皿に視線を落とし、どう励まそうかと考えていると、明羅の無言を肯定と思い込んでアリスがすすり泣きだした。
元より女の子が泣くのは苦手な明羅なので、慌ててアリスをなだめる。

「なっ泣くなつて！俺はアリスのことをバカとかつまらん女の子だとかこれっっぽっちもおもってないからっ！」

その「これっっぽっちも」を示すため、明羅は親指と人差し指でごくごく僅かな隙間を作って見せた。

すすり泣きながらも明羅の訴えを聞いたのか、アリスのすすり泣きがだいぶ収まったが、まだ俯いたままで時折鼻を吸る音が聞こえる。
今しかない、と考え明羅は諭すような口調で言葉を続ける。

「そ、それにアリスに出会って心底よかったと俺は思ってる。もしアリスに出会ってなかったら…俺はとくに死んでると思うぜ。アリスは俺と最初に会った時から親切にしてくれて、この世界のことをいろいろ教えてくれたり、うまい飯も作ってくれた。それにこん

なにかわいい娘がそばにいて嫌がる男は一人もいないと思うぞ？…俺はもつとアリスと一緒に旅をしたい……だからそんなこと言っないいな？」

——勢いで言っただけいいが、恥ずかしいことを平気で言う自分が恥ずかしい、と思うのはそう遠くない未来になるだろう……——

「う、うん…、ありがとっ」

アリスは顔を上げ、明羅の方を向いて微笑んだ。まだ澄んだ蒼い眼は充血していたが、だいぶ機嫌を取り戻したようだ。

『あー、お取り込みの最中に悪いんだけど、そろそろ移動したほうがいいよー』

すっかり存在を忘れていたミドラが唐突に言った。

二人がミドラの方を見ると、サロウ都市がある方向の反対、つまり南を向いていた。

「どうした？まさか……魔獣か？」

明羅がそう問うと、感心したように強く頷いた。

『さすがアキラ、勘が鋭いねー。五百メートルくらいあっちに魔獣が五体いるよ。』

ミドラが南の方向を指差し、『まあ、全然大したこと無さそうだけどね』と付け加えた。するとアリスが尊敬の眼差しをミドラに向けて言う。

「すごいわね…、どうしてわかるの？」

そうアリスが訊くと、ミドラが鼻を鳴らして自慢気に言う。

『ふふんっ、ボクが物や生き物を見つけられる方法は三つあるのだっ！』

………なんか語りだしたぞ………。

早くここを離れんと魔獣に見つかると言っただけはお前じゃないのか！？

てかお前らいつの間に仲良くなったんだ？

そう言っただけでよかったが、アリスも「うんうんそれでっ！？」と興味津々なので何も言わない事にした。

ご主人様の存在の明羅がそんなことを考えているとは露ほどにも知らず、熱心に舌を滑らす。

『ひとつ！匂いで場所を見つけるのさっ。ボクたち魔獣は鼻がスゴくいいから、風で運ばれてくる匂いでだいたいの場所がわかるのだ！ほとんどの魔獣は周囲五百メートルが限界だけど、ボクは周囲一キロまでならなんとかなるのだ！』

「へーすごいわ！さすが最上級魔獣だね。他の魔獣とはひと味もふた味も違うのねっ」

アリスが褒めると、ミドラは嬉しそうにアリスの周りを飛び始めた。ちなみに明羅は魔獣がいつきてもいいように南の方向を見ながら準備運動をしている。

『ふたっ！魔力で場所を見つけるっ！。これは自分の魔力を周り

に放出して触れたものを探知するのだー！でもいっぱい魔力を使っちゃうからあんまりオススメしないのだー」

アリスの周りを飛び回るのをやめ、頭の上に座った。

「へー…魔法とか魔力って結構奥が深いのね」

頭の上に乗ったミドラを優しく撫でながら言う。

そんな二人を明羅は横目に見て、耳を澄ますと近くにいるであろう魔獣の唸り声を聞いた。

「おいっ二人と『みつっー！』…おいこらっ聞けって！」

二人が明羅を見る。アリスとミドラは話に夢中で魔獣が近くにいるのにも拘らず、緊張感が皆無なので少し声を張り上げる。

「すぐ近くに魔獣がいるぞっ。話しはまたあとでにして先に魔獣を片付けるぞ！」

アリスは慌てながらも背中に背負っている長さ一メートル程の先端が丸くなっている木の杖を手に持ち、
明羅に短く声を掛けた。

「何処にいるかわかる？」

明羅が口を開くより先に、ミドラが南の方向の辺り一面二メートルくらいの雑草で覆われている所を指差し軽い口調で言う。

『あっちにいるよー。魔力は全然持ってないみたいだからよわっちー魔獣だと思うよー』

ミドラの言葉が終わると同時に、ちょうどミドラが指差していた雑草が小刻みに揺れ、そこから五体の魔獣が現れた。

体長は一、五メートル程の大きさで、全身赤い鱗に赤い眼、そして腰から地面に届くほどの赤い尻尾が生えている。簡単に言えば、トカゲが二足歩行になっている感じだ。そして、魔獣の手には所々刃こぼれしているサーベルを握っていた。

明羅がまじまじと魔獣を見ていると、アリスが説明してくれた。

「こいつらはリザードよ。下級魔獣の上位の強さで、他の魔獣より知能が発達しているのが特徴よ。まあ…そんなところかしらね」

「おう、ありがとな」

身体は五体のリザードに向けながら横目でミドラを見ると、翼を下にパタパタと動かして空中に停止し、

不敵な笑みを浮かべてリザード達を眺めていた。

明羅はいつりザード達が襲い掛かってもいいように、魔法をいつでも使える状態なのだが、幾ら経っても襲い掛かってくる様子がない。逆に五体共ある一点を見つめていて、その赤い眼は恐怖で見開かれていて、身体を震わせて脅えている様子だ。

その視線を眼で追うとそこには――ミドラがいた。

明羅は訝しげにリザード達を見る。

「こいつら……ミドラを恐がってるのか…?」

『多分そうだろうねー。下級魔獣はボクたちに食べられると思っ普通は近寄らないんだけど、こいつらは恐怖よりも食欲が勝ったんだろっねー。まっここまでこれたのはいいいけどなかなか近付けないってとこかな?』

ミドラはリザード達を見下ろし嘲笑した。

ミドラを見て身体を震わせて、それでも涎を垂らしながらこちらを食材を見るような眼で見てくるリザード達を見て、明羅は眉をひそめて呟いた。

「……………襲って来ないのはいいけど、後ろをうつろちよろされるのも癪だし、ここで殺ってくか…。」

「私は後ろの二体をやるからアキラ君は前の方にいる三体よろしくーっ」

「俺のほうが一体多い気が……」

明羅が怪訝な顔つきでアリスを見ると、アリスに指を差され、叱咤された。

「そこっ！男ならぐちぐち言わない！さっさと行くわよっ。氷山に眠る魔神——」

杖をリザード達に向け、アリスは詠唱を始めた。

「さて、いきますか…」

虚空に放った呟きが終わると同時に、地面を力一杯蹴った。

八話 到着

疾風の如く駆け、先頭にいたりザードとの距離を一瞬で詰める。未だ明羅の速さについてこれず、呆然と立ちつくしているリザードに、勢いをつけた前蹴りを放った。モロにその前蹴りを腹に喰らったりザードは手に持っていたサーベルを地面に落としてよろめく。明羅は地面に落ちているサーベルを素早く拾い、よろめいているリザードの頭に振り下ろした。が、リザードの頭の鱗によって、金属音を立て虚しく弾かれそこに、左右にいた二匹のリザードが明羅の胸を斬ろうとサーベルを横に振る。明羅はそれを後ろに跳躍して避け、間合いを取った。——— 実にここまで四秒もかかっていない。

後ろで明羅の動きを見ていたアリスは詠唱をしながらも驚いた表情で明羅を見て、ミドラはさほど驚いた様子は無く、ただそのくらいは出来て当たり前、という表情をしていた。

……こいつの鱗って硬いなー。全力でサーベルを振ったのにびくともしてねえ…。

まあ、サーベルがぼろぼろだし剣握ったのが初めてだからしゃーねえか。

リザード達が襲ってこないのも後ろを振り向きアリスとミドラを見ると、

アリスはまだ詠唱中でミドラはさっきと同じ状態だった。

明羅はもう一度リザード達の方を向き、今さっき腹に前蹴りをお見舞いしてやったりザードの額に右人差し指を向けて、ここにいる全員に聞こえるように声を張り上げた。

「これが昨夜の特訓の成果だっ。”レイ”！」

言った刹那、明羅の人差し指の指先から光の光線が勢い良く発射され、リザードの眉間に一円玉くらいの穴が開き、そこから噴水のように青い鮮血を噴き出し一瞬だけ痙攣して力なく倒れた。

明羅はその光景を見て、胃から何かが上がってくる感触を覚えた。すると、今まで不敵な笑みでリザード達を見下ろしていたミドラが驚愕の顔で明羅を見て、

感嘆の声（念話？）を上げた。

『ヘー…もう中級魔法が使えるようになったんだねー。あとは威力かなー。これじゃあまだ常人並みだからね』

ミドラの念話に答えようと口を開きかけたが、その前にリザード達全員が襲い掛かってきた。

ここでも恐怖よりも食欲が勝ったようだ。

明羅はサーベルを右手で持ち、左足を少し後ろに下げて構える。

最初に斬りかかってきたリザードのサーベルを明羅の持っているサーベルで上に弾き、

鱗が無いがら空きの腹にサーベルを突き刺し、間髪をいれずに隣にいるリザードの眉間にレイを放つ。

正面と左から青い鮮血が降り注ぎ、明羅の身体を青く染めていく。耳をつんざく程の悲鳴を上げながら地面に倒れるリザードより速く、一体のリザードが明羅の胸を斬ろうとサーベルを横殴りに振った。

明羅はそれを上に飛んで避けると、最後の四匹目のリザードも一緒に飛んでいて、袈裟懸けに斬りかかってきたのをサーベルを横にして何とか防ぐが、赤い鱗でびっしり覆われている尻尾で腹を思いつきり殴られた。空中にいたので踏ん張る事もできず、アリスとミドラがいる方の地面に背中から叩きつけられ、小さく悲鳴を上げて肺にある空気を全部だすはめになった。

と、そこでアリスが詠唱を終えたように魔法を放った。

「青く清らかな精霊プラミュよ凍てつきの氷で切り刻めよ。」アイシクルエッジ”！」

アリスの杖の先から幾つもの氷の刃がリザード達に飛来し、赤い鱗など関係無しにその身体を切り刻んでいく。

明羅が起き上がって見たときには、青い血だまりの上に見るも無残な五体のリザードの死体があった。

それを見た明羅は、サーベルで刺したときの肉を裂く感触、恐怖の眼で見てくる魔獣、自分の制服と身体にべっとり付いている青い血そして今日の前にある死体を見て、サーベルを地面に落とし、胃から嘔き上がる物を我慢できずに吐いた。

「おええええええ……」

しかし、ミドラはともかく明羅と同年くらいのアリスは表情をほとんど変えずに、

遠くから「これは自分で解決するしかないわ」と昔を思い出しながら呟き、

嘔吐している明羅をミドラと一緒に温かい眼で見守っていた。

――

リザードとの戦闘を終え、今はサロウ都市に向かって歩いている。しかし、明羅の心はここにあらず、といった状態である。俺は別に悪い事をしたわけじゃない………はずだ。

殺されそうになったから殺す、そんなの当たり前じゃないか。

今更なんだ！何人も喧嘩で半殺しにしてきたじゃないか！

……くそっあの感触を思い出すだけで吐きそうになってきやがる。

……でも、俺が”仲間”と思っている奴”を守る為なら……何度でも吐いてやるっ！

例え、それが人間であつても

……それにしても

「腹がへつたな——」

丁度その時、明羅の腹が悲鳴を上げた。

その悲鳴を聞き、アリスが微笑みながら言う。

「あと少しで晩ご飯だからそれまで我慢しててね」

ちなみに、アリスとミドラは明羅が吐いた話題を一切出さなかった。慰めることも、励ますことも、同情することも一切しなかったが、そのほうが明羅にとっては嬉しかった。

これは二人（一人と一匹）の優しい気遣いだと思うので、明羅は心の中で感謝の言葉をかけておく。

話が尽きてしまったので何か話題は無いかと考えていると、丁度いい話題があつたのでアリスとミドラに話しかけた。

「なあなあ、さっきの奴らって一様下級魔獣だよな？」

「うん、そうだけど？」

「下級魔獣にしちゃ強くな？」

そう訊くと、アリスが顎に人差し指を当てて答えた。

「アキラ君のいた世界じゃ魔獣がどのくらいの強さかしらないけど……」

「いやいや……魔獣とかいないから。」

明羅が内心ツツコンでいるとは知らず、アリスは話を続ける。

「この世界は人間よりも魔獣のほうが圧倒的に強いわ。今さっきのリザードだって本来はちゃんと訓練受けている兵士が数十人いないと倒せないくらい強いわ。たぶんミドラを恐がって思うように身体が動かせなかったんじゃないかしら」

「なるほど……じゃあアリスって結構強いんじゃないか？」

アリスが邪気の無い笑みを浮かべた。

「自慢じゃないけど普通の人よりは強いと思ってるわ。アキラ君だっていい動きだったわよ？あんなに速く動ける人は見たこと無いわっ」

すると、今まで明羅の頭の上で寝ていたミドラが身体を起こした。

『そうそう、あの動きは大したものだったよ。それにまだまだ強くなると思うよー。』

二人（一人と一匹）に純粹に褒められ、明羅は照れ笑いしながら頭をかいた。

——いや、かこうとしたがかけなかった。ミドラに撥ねつけられたからだ。

撥ねつけられた手を見ながら明羅は思う。

俺ってミドラが言うにはご主人的存在だよね!?

扱い方ちよつとひどくネ!?

――――

今は深夜、アリスが作った白いスープ……ホワイトシチューを食べ
ている。ちなみに明羅は五杯目だ。

シチューを食べながらアリスが愚痴を零す。

「まったく、まだ子供の私たちが何をするっていうの!?!それに
もつと優しい言い方はないのかしらっ」

随分ご立腹なアリスを「まあまあ」と明羅が宥める。

「しょうがないよ。今は戦争中なんだろう?それにこんな夜中に街に
入ろうとするのを怪しんで当然っしょ」

明羅の言うとおり、ここに来るまでに何度か魔獣達に足止めをくら
ったのだ。

あまり強い魔獣ではなかったたので難なく倒せたのだが、それでも一
回戦闘するたびに休憩していたので、

ここに着いた時は深夜になっていたのだ。

明羅が宥めるが、アリスは納得していないようだ。また愚痴を再開
する。

何度も聞かされる愚痴に耐えかね、頭の上にいるミドラに救援を求
める。

「私は早くお風呂に入りたいわ。身体とか臭わないかしら……」そう言い、アリスが自分の身体を嗅ぎ始めた。

それに苦笑いする明羅だが、自分も風呂に入りたいのでサロウ都市を指差して二人（一人と一匹）を促す。

「さっさと行こうぜ」

明羅の言葉にアリスとミドラは短く返事を返す。

「ええっ」

『あいあいさー』

三人（二人と一匹）は期待に胸を躍らせ、歩みを速めた。

延々と続く高さ五メートル程の重厚な壁を間近で見ても、明羅は驚きを隠せなかった。

三人（二人と一匹）はそれぞれ感心したようにその重厚な壁を眺めた。

「なんか……すげえー。……戦争中って言うってもここって普通の都市だよな？この門もめっちゃ頑丈そうだな……」

目の前にある、今は固く閉ざされているこつこつ門を指差して言う。

「この都市はリスレム王国の中では二番目に大きな都市よ」

「へーっそりやでかい壁なわけだよ」

『でかいだけってわけじゃなさそうだよ』

壁を眺めるのをやめて頭の上にいるミドラに視線を移す。

「どういうことだ？」

『壁に七つの魔力が宿ってる。魔法で壊されないようにしてるのかなー』

「七つの”魔鉱石”を使って壁を作ってるってこと？」

『その通りだとボクは思うよー』

知らない単語のせいでまったく話しについていけないので、明羅は訝しげに訊く。

「その……魔鉱石って何だ？」

アリスとミドラが顔を見合わせる。そしてアリスが納得がいったように頷いた。

「アキラ君は知らないんだったね。えーっとね…魔鉱石は八つ種類がああってね、

一つ目は”焰魔鉱石”（えんまこうせき）。この魔鉱石には火の魔力が宿っているわ。

二つ目は”雹魔鉱石”（ひょうまこうせき）。この魔鉱石には氷

の魔力が宿っているわ。

三つ目は”地魔鉱石”（つちまこうせき）。この魔鉱石には土の魔力が宿っているわ。

四つ目は”楓魔鉱石”（ふうまこうせき）。この魔鉱石には風の魔力が宿っているわ。

五つ目は”電魔鉱石”（でんまこうせき）。この魔鉱石には雷の魔力が宿っているわ。

六つ目は”黒魔鉱石”（くろまこうせき）。この魔鉱石には闇の魔力が宿っているわ。

七つ目は”白魔鉱石”（しろまこうせき）。この魔鉱石には光の魔力が宿っているわ。」

喋り疲れたのか、腰にある小さな袋から水が入っている鉄のコップを取り出し、一気に飲み干した。

「ぶはーっ……で、最後の魔鉱石が”天魔鉱石”。この魔鉱石には二種類以上の魔力の属性が宿っているけど、希少価値が高いから滅多に見かけないわ。」

明羅は頻りに頷きながら頭の中を一通り整理し、アリスに感謝の言葉を掛けようと口を開いた。ちょうどその時、壁の上から人の声が聞こえた。

「そこのお前ら！そこで何をしている！」

三人（二人と一匹）が声のした方を見上げると（月の光のおかげでよく見えた）、五十歳後半くらいの顔立ちに銀色の短髪に茶色の眼、顔以外鉄の鎧を身に纏っている門番らしき人がこちらを向いて怒鳴り散らしていた。

「そこで何をしているんだと訊いているんだ！ディアロス帝国の手先か！？」

——何か知らんが凄いいりりしてんなあ…。

門番のじいさんをしげしげと見て、明羅が思考に耽っていると、横にいるアリスが声を出した。

「私たちは旅の者です！怪しい人ではありませんーん！都市に入りたいので門を開けてくれませんかー？」

すると、門番のじいさんが嘲笑した。

「こんな夜中に門を開けてくれって言われて開ける馬鹿がどこにいるんだ！？明日の朝に身体検査をしてもらって出直せっ！」

そう言い、門番のじいさんがどこかえ歩いて行ってしまった。

「むきいーーーーー！こっちが下手に出てやってたら何あの態度！？腹立つーーーー！」

アリスはものすごくご立腹のようだ。

——そして今に至る。

「今度会ったら氷漬けにしてやるんだからっ」

アリスにかれこれ一時間は愚痴を聞かされている。しかもまだ続くようだ。

明羅は嫌と言うほど愚痴を聞かされたし、もう愚痴を聞きたくないので、アリスが愚痴を言っている最中に口を挟んだ。

「アリスー…もう夜中だし寝たほうがいいぞ？てか寝てくれ」

残り僅かな気力を振り絞って言ったが、軽くスルーされた。

アリスも優しい心を持っているが、やはり貴族の端くれ、馬鹿にされるのは我慢出来ないみたいだ……。

ようやくアリスが眠ってくれた頃には、空が明るくなってからだった。

八話 到着（後書き）

やっと都市に着いた……。
長かった——！

九話 宿屋

門から離れている木の上で明羅は目を覚ました。いや、目を覚ましたというのは少しおかしい。

昨日の夜……いや今日の明け方、明羅は少しでも睡眠時間を取ろうと、魔力コントロールの練習をせずに布団の中に入ったのだが、アリスの愚痴が頭の中で何度も何度も再生され、結局一睡も出来なかったからだ。

明羅はもう寝る事を諦め、魔力コントロールの特訓に励んでいる。隣には昨日と同じようなハンモックを明羅が作って（この世界にはハンモックという言葉は無いらしい）、その上で気持ち良さそうに眠っているアリスとミドラがいる。

羨ましいと思いつつも、意識を集中させる為に目を瞑った。

――――

「じゃあそろそろ行くか」

「そうね、行きましょっ」

短く言葉を交わし、ミドラを頭に乗せて木の上から飛び降りた。

昨日追い払われた所まで来てみると、巨大な門が開かれていて、都市の風景が見えてきた。

まだ朝なのに都市の中は賑わっていた。門のそばまで行くと、昨日の鉄の鎧を着た銀髪に茶色い眼のじいさんと、同じく鉄の鎧を着た銀髪に茶色い眼の三十歳前半のおじさんが腰に”刃が無い剣”を差して、門を塞ぐように立っていた。

明羅達の姿を認識したのか、門番のじいさんがおじさんの方に一言二言話したかと思えば、門番のおじさんが近づいてきた。

「サロウ都市に入りたいのですか？」

「はい、そうです」

「では身分証明書かギルドカードをおもちですか？」

明羅はここで何一つ証明出来る物がない事を思い出し、アリスに目で助けを求めた。

アリスは苦笑いして頷き、口を開いた。

「あー、私は身分証明書持つてるけど……この人は旅の途中で落としちゃったみたい」

あははつと愛想笑いを浮かべた。門番のおじさんはアリスに見惚れていたのか、少し返事が遅れた。

「……あ、はい。それでしたら銀貨一枚払っていただけましたら通行書をお渡ししますので大丈夫です。ですが通行書の有効期限は一週間となっておりますので、それまでに冒険者ギルドなどで身分証明書かギルドカードを発行して下さい」

「わかりました」

アリスが銀貨一枚と身分証明書を門番のおじさんに渡した。門番のおじさんはアリスの身分証明書を流し呼んでアリスに返し、胸ポケットからポイントカードくらいの大きさの紙を取り出して明羅に渡してくれた。

「ありがとうございます」

「いえっ、では最後に怪しい物を持っていないか確認させていただきます」

門番のおじさんが腰に付けてある袋から長さ五十センチくらいの棒を取り出し、明羅の身体に沿って動かす。同じようにアリスも測っていく。何事も無かったようで、棒を袋にしまった。

「はい、お待たせしました。それではようこそ、サロウ都市へ」

――

明羅が最初に思った感想は「戦争中にしては賑やかだな」だ。

明羅は戦争中の国に行った事が無いから予想する事しか出来ないが、明羅の予想を上回る賑やかさだった。

「そっついえばさっきの門番のおじさん、ミドラの方を見向きもしなかったけど、ミドラって珍しいんじゃないのか？」

「確かにそうね……どうしてかしら」

明羅とアリスが訝しげにミドラを見ると、今まで明羅の頭の上で寝ていた様で身体を起こしている最中だった。

『…………それはボクが光の魔力で姿を隠していたからだよ』

「そんな事まで出来るのか!？」

『うん。ボクにとっては朝飯前だよ。今も姿を隠しているからね』

「……やっぱりミドラは凄いわね」

アリスが感心した様に頷く。明羅もアリスにつられて二、三回頷いた。

ここで話題が尽きてしまったので、明羅が話題を切り出した。

「ところで俺達は今何処に向かつてるんだ？」

そう訊くと、アリスが考える素振りを見せた。

「えーっとね…、最初に宿をとろうと思うんだけど………いいかな？」

「いいよ。ミドラもいいだろう？」

返事を待ったがなかなか帰ってこない。眼を上に向けて見るが、見えるはずもなく、耳を澄ますと僅かにミドラの寝息が聞こえてきた。

「あー……ミドラは寝てるからほっとこう。じゃっ宿に決定だな」

「りょーかい。いきましょっ」

歩いている人たちに何処の宿が良いか訊いてみると、一番多かったのが“ダイン亭”だったのでそこに向かう事にした。
今はそのダイル亭の目の前。都市に入った時は太陽はまだ東よりだ

つたが、今は真上に来ている。

「なかなかでかいな……」

「そ、そうね…。入らましょ」

アリスが先頭に立ち、その後ろを明羅が続いている。

「そっといえば金は大丈夫なのか？」

「ええっ、お金のことは全く気にしなくて良いわよ」

アリスの顔が悪戯っ子のように笑って見えたのは明羅の見間違いだろう…。

まあ、ここはこの世界にいた住人に任せる事にした。

ダイル亭の扉を開けて中に入ったアリスに続いて明羅も中に入る。扉を閉め中を見渡すと、外に比べて大分静かな雰囲気が漂っていた。右奥に受付らしき所と、その奥に厨房があり、左奥には階段があった。一階は食事用のテーブルと椅子がたくさん並べてあり、何人かの人が喋りながら食事を取っていた。明羅は一通り眺めて独り言を呟いた。

「な、なんか高級ホテルみたいだな……」

「ホテルってなに？」

「えっ？…あ、あー何でもない。気にするな」

「うん。確かにいい所かなっ。ここなら大丈夫かな？」

アリスは満足したように頷くと、然も自分の家のように堂々と受付に歩いていった。

受付には、肩で綺麗に揃えられた銀髪に真紅の眼に、白のワンピースに膝上までの赤のスカートからはほつそりとした足が惜しげもなく出されていた。身長はアリスと然程変わらないくらいの明るい雰囲気を出しているまだ十歳後半くらいの美少女と言っても過言ではない、整った顔立ちの少女が営業スマイルを作って明羅達を見ていた。

近くまで行くと、受付の少女が深深と頭を下げ、声を出した。

「いらっしやいませ！本日はどのようなご用件ですか？」

ここはアリスに任せる事にして明羅は沈黙を続けた。アリスは慣れているのか、はきはきと答える。

「この宿に泊まりたいんだけど、二つ部屋開いてる？」

「すみません。シングルのお部屋は今のところ一つも空いておりません。その代わりと言っては何ですが、二、三人用のお部屋なら空いていますかどうしますか？」

「うーん……、アキラ君…ならいいかな…」

「ん？何か呼んだ？」

明羅を横目で見ていたアリスにそう訊くと、アリスは「何でもない」と慌てて首と手を左右にぶんぶん振り、直ぐに受付の方を向いた。

明羅が疑問の眼差しで受付を見ると、営業スマイルではない笑顔が浮かべた。

明羅が首を傾げていると、アリスが赤面した顔で口を開いた。

「じ、じゃあそれで……………」

「畏まりました。ではご案内させていただきます」

受付の少女が付いてきて、と目配せをしてから左奥にある階段に足を向けた。明羅とアリスも無言で付いていく。

三階まで歩き、その階の303号室と書かれている扉の所まで歩いていった。

「ここが泊まってもらうお部屋です。後はこれがこのお部屋の鍵です。あ、申し遅れました、私の名前はソラと申します。何か困ったことがあれば言ってお下さいね」

「はい、分かりました」

「それでは失礼します」

受付の少女が踵を返そうとするのを今まで黙っていた明羅が慌てて呼び止めた。

「ソ、ソラさん、ちょっと待って!」

「はい?何でしょうか」

「俺の部屋は?」

すると、明羅の言ったことが可笑しかったようで、口元に手を当ててくすくす笑い出した。

「アリスさんと同じ303号室ですよ」

「…………マジで？」

「マジです」

明羅が固まっていると、顔を赤面させているアリスが口を開いた。

「へ、部屋がここしか空いてなかったから仕方がなかったのよ！別に深い意味は無いわ！さっさと入るわよ！」

「お…おう」

ほとんど怒鳴り声に近いアリスの声に気圧され、一も二も無く頷いた。

アリスに続いて部屋に入る前に、もう一度受付の少女ソラの方を見ると、にこにこ笑いながら手を振っていた。明羅はそれに苦笑いして答えて部屋に入った。

部屋の中は教室くらいの大きさがあり、木の床に茶色の絨毯が敷かれていて、右奥に少し隙間を空けてベッドが二つ置いてあった。真ん中には木のテーブルと三つの椅子、左手前には筆筒が置かれていた。

しばらく観察していると、ベッドに座っていたアリスに不意に声をかけられた。

「そんな所に突っ立ってないで中に入ってきたら？」

「おう。…………これからどうすんの？」

「ちょっと休憩したらご飯を食べに行こうと思う」

「了解、じゃあ少し寝るかな。飯食うときになったら起こしてー」

上の制服を脱いで筆筭に仕舞い、アリスが座っていないベッドの方に横になった。

「はい、お休み」

「お休み」

今朝は一睡もしていなかったので明羅は直ぐに意識を手放した。

――――

「アキラ君、ご飯食べに行くよ」

アリスの声で一瞬で意識が覚醒した。元より明羅は寝ぼけない体質なのだ。

身体を起こしながら扉の所にいるアリスの方に視線を向けた。

「了解、どのくらい寝てた？」

「だいたい二時間くらいかな」

「もうそんな時間か……、さっさと飯を食いに行くか」

「朝ご飯食べてないからお腹減ったー」

ミドラをベッドに寝かせ、アリスと一緒に一階の食堂まで歩いていった。

今は夕方前だからか、食堂で飯を食べている人は（まだ飯は運ばれていないようで談笑している）明羅と同じくらいの年の少年二人と少女一人の三人しかいなかった。

空いている席に座り、受付をしていた少女ソラを呼ぶ。呼ばれたソラは片手に料理名が書かれている紙を明羅とアリスにそれぞれ渡して明るい声を出した。

「ご注文はいかが致しますか？」

「……私はブローバースープで」

「俺は………（汗）」

何が出てくるか分からん！どうする！？……とにかく量の多いような肉を選ぼう。

「じゃあ…バウロスの丸焼きを一つ」

ソラがなぜか少し驚いたように目を見開いたが、直ぐに何事も無かったように営業スマイルを浮かべた。

「畏まりました。しばらくお待ちください」

最後に頭を下げて厨房に歩いていった。

明羅は「まだ若いのに凄いなー」と呟きながら厨房に歩いていくソラを見送った。明羅の視界からソラがいなくなったので正面にいるアリスの方に視線を移すと、それを見計らったようにアリスが話し

掛けてきた。

「アキラ君、ご飯を食べたら武器屋と防具屋アクセサリー店に行きたいんだけどいいかな？」

「俺も行きなかったとこだし行こうぜ。武器何にしようかなー」

「剣がいいんじゃない？」

独り言のつもりだったのだが、ちゃんと聞こえていたようでアリスが眼をキラキラさせて訊いてきた。

「何で？剣を握ったの昨日が初めてなんだけど……」

「そうなの？でも初心者には見えなかったわよ？」

——まあ、金属バットとか鉄パイプとかなら振り回したことあるけど……。

そう言おうとしたが、後々の説明が面倒臭かったから苦笑いして頷くだけにした。と、丁度その時に厨房からソラを含めて何人かの人々が料理を運んできた。明羅が頼んだバウロスの丸焼きは簡単に分かった。

他の皿に比べて二回りほど大きい皿に体長三十センチはある魔獣の丸焼きが香ばしい匂いが漂わせていたからだ。

しかし、それは一つではなく二つ運ばれてきた。

もう一つは向こうの三人の誰かの物のようだ。三人で食べる、という事も有り得るのだが、皿が全部で五皿運ばれて来たことから明羅はそう考えたのだ。案の定、がっしりとした身体つきの少年の目の前にバウロスの丸焼きが乗っかっている皿が鈍い音を立てて置かれ

た。

明羅がその少年をずっと見ていると、明羅の視線に気付いたのか、こちらを怪訝な目で見てきた。

互いの視線が交差する中での無言の罵り合い。

（おいおい、そんな身体で全部食えんのか？）

（そう言うお前は図体がでかいだけで中身はすっからかんじゃねえのか？）

（はっ、この立派な身体の中にでかい胃袋が入ってんだよ）

（俺の胃袋はブラックホール並みの凄さだ。でかなくてもいいんだよ、この筋肉ばっか）

（言ってる、このひよろひよろ野郎）

（ばっかばっか、ばっか）

（あほ、まぬけ、とんちんかす）

（ちっ、このままじゃ埒が明かない……おっ目の前に丁度いいのがあるじゃねえか）

（そうだな、いいだろう受けて立つ）

お互いほとんど同時に指を突き指し合い、有らん限りの声を張り上げた。

「決闘じゃあああ！」「」

ここで、ダイノ亭の食堂で、戦いの火蓋が切って落とされた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0462u/>

ジョーカー

2011年8月15日14時14分発行